真・恋姫†無双～技を極める傭兵

doragon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双～技を極める傭兵

【Ｎコード】
Ｎ７１７９Ｕ

【作者名】
ｄｏｒａｇｏｎ

【あらすじ】
男は誰かに仕えることを良しとせず、傭兵だった。
諸国を巡り、いろんな王や武将や軍師などと交流する。
技の鬼神と呼ばれる男は恋姫の世界でどう生きるのか……これは男の生涯を描いた物語である。

主人公設定（前書き）

作者「並行連載頑張ります」

龍牙「まあ、頑張れよ☆」

作者「お前はくんな！」

龍牙「はっはっは☆」

作者「笑ってごまかすな！」

主人公設定

性　祇（ぎ）名　柳（りゅう）字　罫空（けいくう）　真名　琥音（くいん）

年２０歳

特徴　服装は青で染めており、上は着物。下はズボン。

雇い主などには敬語を使うが、基本きさくで、フランク。

又、何事においても金を優先する所がある。

自分に好意を寄せる相手に対しては、その気持ちには必ず応える。

恋愛関係においては相手に尽くすタイプであるが、一途と言うわけではない。

戦闘においては、力は低いが、守においては中々で粘って勝つタイプ。

生まれつき、目や耳が優れており、相手の動きや呼吸を聞いて先読みをする事が出来るが……身体が追いつかないなど万能では無い。

又、生まれついての特殊能力で『瞬間完全記憶能力』を持っており、これにより相手の戦闘技術を覚え、訓練して身につける。

努力型で技術を組み合わせる応用するなどして、強くなることを望

んでいる。

武器は普通の剣（開始時点）

傭兵としての始まり（前書き）

お待たせしました。

序章という事でいくつか書きます。

傭兵としての始まり

「それじゃあ、始めましょうか？」

「……」

俺の前には桃色な髪を後ろで纏めた女がいた。

どちらも剣を構えている。

俺は訳が分からなかった……そしてこう思う。

どうしてこうなったのだと……。

俺の名は性は祇（ぎ）　名は柳（りゅう）　字は罫空（けいくう）　真名は琥音（くいん）。

父は戦場で死に、母は病気で死んでしまった。

身よりがいない俺は旅をしていた。

路銀を稼ぐために傭兵として働くことにした。

父親は国のために戦っていたが、俺は思う。

何故、国のために必死になるのだと……死んでしまえば元も子もないと思うが……。

だから、俺は忠誠心など持ち合わせてはいない。

傭兵をするのはあくまで生きるためだ。

兵士は儲かる。

死にそうになったら最悪逃げてしまえば良い。

とりあえず傭兵として手始めに、長沙太守の孫堅のところに行く事にした。

荊州刺史の劉表と近頃戦が行われるらしいという風聞を聞いたのもある。

江東の虎と名高い孫堅なら劉表に勝つだろう。

傭兵として働くなら勝つ可能性の高いところにいた方がそれだけ生き残れる確率も上がるしな。

戦場自体は初めてだが、人殺しなら経験している。

旅をする中で盗賊に襲われたから殺した。

父から多少の剣術を教えてもらっていたので、ある程度は戦える。

良く、人殺しをすれば後々反動がくると聞くが俺は何も感じなかった。

俺はやはり人としてズレているのだろうな……俺には人とは違う才能もある……。

まあ、とにかく俺は長沙太守の孫堅のところに行った。

そして長沙に着いた俺は新兵としての試験を受けることにした。

俺には武将と戦えるだけの力は無いしな。

まあ、戦が終わればすぐに抜けるが……。

試験方法は簡単だ。

他の相手と手合わせをするだけだ。

俺以外の何人かも試合場へと足を運び、訓練用の剣や槍を持って相手と対峙する。

「それでは、始めい！」

試験管の兵が言う。その後ろには銀髪を後ろで纏めた妙齢の女性である孫呉の武将の黄蓋がいた

俺は試験を受ける前に武将の名前を調べていたから多少は分かる。

黄蓋の名は有名だったと言うのもあるが……。

ちなみに側には孫堅もいた。

とにかく試験が始まった。

「さあ、かかってくるが良い」

俺の目の前にいる筋肉質な男が言う。

「遠慮しとくぜ……しんどいしな」

「そうか……ならば俺から行ってやろう」

男は俺に襲いかかってきた。

そして頭を斬るように剣を振るう。

俺は後ろに跳躍して避ける。

男は俺を追って首を斬るために剣を振るう。

俺は男が剣を振るうより先に剣を振るって、それを弾いて防ぐ。

男は体勢を崩してたたらを踏む。

その隙に首に剣を突きつけた。

「どうする？　続けるか？」

「降参だ……」

それを聞いて俺は剣を鞘に納めた。

「そこのあなた……ちょっと良いかしら？」

「俺ですか？」

何故か孫堅が近づいてきた。

「ええっ……そうよ……一緒についてきて欲しいのだけど」

「はあ……」

俺がそう言うと、孫堅は「こっちよ」と言って、歩き出す。

黄蓋も孫堅の後ろを追う。

俺は何かあったのかと思いながらそれに続いて行った。

そこは庭だった。

孫堅は俺の前を歩いて止まる。

それを離れて見ている黄蓋もいた。

「剣を抜きなさい」

「え？」

「いいから剣を抜きなさい！」

「！」

孫堅から凄まじい殺気が放たれる。

流石は江東の虎と呼ばれる孫堅だ。

こんな殺気は今まで感じたことが無かった。
武将というのはやはり格が違う。
俺は死の恐怖に震えて身体が動かなかった。
とにかく何とか剣を抜く。
「それじゃあ、始めましょうか？」
孫堅は剣を抜きながら言う。
「……」
俺は何も言えなかった。
そして、孫堅が襲いかかってきた。
そして剣を上から下へと振るう。
俺はそれを防いだ。
腕が痺れ、身体がぐらつきそうになったが後ろに跳躍して間合いを離す。
孫堅は逃さないとばかりに追いかけて剣を振るう。
俺は剣では防げないと分かり、避け続ける。
「あなた、面白いわね」

言いながらも剣を振るう。

俺は避けることに必死で言葉を返せない。

「私の剣を避けれる新兵なんて今まで居なかったわよ？」

「それは孫堅様が手加減しているからでしょう」

そう、孫堅は本気では無い。俺にとっては重くて速い斬撃ではあるが……。

そうでなければ俺は一瞬で殺されている。

「良く分かるわね……そして、あなたは私の動きを読んでいるように感じるわ……」

「目と耳は良いんで……」

俺は相手の動きを見て、呼吸を聞く事で多少の先読みが出来る。

もっとも反撃なんてものはこの場では出来ないが……。

「そう……じゃあしっかりと見て、聴きなさい！」

孫堅は足を踏み出すと首狙いに剣を振るう。

本気の一撃だ。

避けることは出来ない。

俺は孫堅が構えた瞬間に全力で剣を振るっていた。

そうしなければ死ぬからだ。

俺は吹っ飛ばされ地面を転がる。

「ぐぅ……」

腕は痺れ、力が入らない。

視界もぐらぐら揺れている。

剣も弾かれていた。

「……祭、この男を育てなさい」

「うむ、お任せくだされ……堅殿、面白い若造が現れましたな」

「ええっ、本当に……」

俺はそれを聞きながら意識を失う。

目を覚ますと、俺は何処かの部屋にいた。

此処は何処なのだろうか？

混乱しながらも俺は部屋を出て、歩く。

今居るのは屋敷内らしい。

どうやら城の中のようだ。

孫堅が運んでくれたのだろうか……。

何のために？

俺は外を目指して歩く。

孫堅と戦った庭についた。

空が明るすぎる事から俺は夜の間、ずっと眠っていたようだ。

孫堅は天才だろう……戦ってそれが分かった。

武将というのは皆、武の才能に恵まれているのだろう。

俺にはそれが無い。特殊な才能はあるが……。

だからこそ……。

俺は目を瞑り、頭の中で孫堅を浮かべる。

孫堅の呼吸、体重のかけ方、身のこなし、剣の振り方など戦闘技術を思い出し、自分という存在を孫堅に合わせるように剣を振るっていく。

聞こえるのは俺が振るう剣の風切り音だけだった。

やがて、それすらも聞こえなくなっていく。

傭兵の才能

「はあっ！」

俺は剣を力の限り振るった。

「はあ……はあ……はあ」

俺は剣を鞘に納めた。

孫堅の戦闘技術を再現していたが、かなり疲労した。

まさに虎と言うべき獣の剣だ。力は確かに伝わりやすいが……。

防御は孫堅ならできるだろうが、俺にはこれを再現しているときは無理だ。

それにきつい……まあ、身体には大分染みついたがな。

才能を持つ者は凄まじい。

腹も減ってきた。

何か食べ物のあるところへ行こうとするが……。

「ちょっと待ってくれんか？」

「何でしょう黄蓋様？」

俺に声をかけてきたのは黄蓋だった。

「お主のあの動きはどういうことじゃ……」

「動きというのは？」

「とぼけるでない！……あれはまるで……」

どうやら見られていたようだ。

「孫堅様の動きですか？」

「！」

俺が問いかけると黄蓋は驚いた。

「確かにさっきまで孫堅様の動きを模倣していました」

「あれが模倣じゃと……」

なにやら訝しがっている。教えようか……。

「俺には武の才能がありませんでした。目は相手の動きを良く捉え、耳は呼吸を良く聴けますが……」

「……」

黄蓋は沈黙する。

「だが、俺には生まれついての才能があった。目で見た物、聴いた

物を絶対に忘れず覚えることができるという才能が……」

「何じゃと！？」

「だからこそ、俺は思いついた。相手の戦闘技術を……動き、呼吸、体重のかけ方、武器の使い方を覚えてそれを身につければ良い。そうすれば強くなれると……。」

「確かに、力はともかく技術は良くなるじゃろうな……」

「ああっ、俺はそうやって強くなる……武の才能が無いなら覚えた技術でそれを補う。俺の本領ですよ」

「そうか……本当に面白い若造じゃの……ならばわしの弓を覚えてみせい！」

黄蓋は的を持ってきて、そこから離れると弓を構えて矢を番える。

俺はそれを見て、呼吸を聴く。

そして、矢を放った。

的の真ん中に突き刺さる。

次々と矢が放たれ、矢は的に突き刺さっていた。

「どうじゃ……覚えたか？」

「しっかりと覚えました」

「そうか……昼にまた来る……身につけておくのじゃぞ」

「はい」

「それと若造の名は何じゃ？」

「性は祇、名は柳、字は罫空です」

「では、祇柳……これからわしがみっちり鍛える。覚悟は良いかの？」

「はい……俺の真名は琥音です。よろしくお願いします」

「うむ、わしの真名は祭じゃ……良い返事じゃったぞ」

「はい……武人として強くなりたいのはありますが、何より女性に負けるのは男として悔しいですから」

「そうかそうか、良い心意気じゃ……気に入ったぞ」

祭は俺の背中を叩く。

「後、敬語は止せ……似合っておらんぞ」

「そうか？　じゃあ素で話すか……これからよろしく頼むぜ祭さん」

「うむ、任せておけ」

祭は笑いながら庭から去っていた。

俺も飯を食べるために庭から離れる。

飯を食べた後、再度孫堅の戦闘技術を再現する。

完全に身につけるためだ。

その後、弓を持って矢を番える。

祭の弓術を思い出し、それに自分を合わせる。

矢を的に放つ。

矢は的の真ん中には刺さらずに、ズレて的の外側に刺さる。

俺はひたすら祭の弓術を身につけるために矢を放っていた。

腕が疲れたので休んでいた。

弓というのは引くときにかなり力がいる。

今まで弓を使っていないので、慣れるには時間がかかる。

祭の弓術は身についたが……。

「どうじゃ？　身につけたかの？」

祭の声に振り向くと、側には二人の少女がいた。
一人は紫の髪を結っている軽装で腰の後ろに鈴を付けた剣を差している。もう一人は黒の長髪に、全身黒い装束をしていて背中に直刀を背負っていた。

「ああっ、なんとかな」

「では見せてもらおうかの」

「ああっ」

俺は弓を構えて、矢を番える。

そして放つ。

的に見事刺さった。

俺は次々矢を放つ。的に全て突き刺さっていた。

「うむ、見事じゃ……」

「……」

「凄いです。まるで祭様みたい……」

軽装の少女は不審な目で俺を見つめ、黒い装束の少女は驚いていた。

「俺は祇柳、字は罫空だ……二人の名前を教えてくれないか？」

「我が名は甘寧、字は興覇だ」

「私は周泰、字は幼平です」

「二人とも祇柳はわしの副将になる男じゃ……よろしく頼むぞ」

「何！？……俺は聞いてないぞ！？」

「何を言っておる……よろしく頼むと言っておったではないか？」

「うぐ！……それはそうだが……」

「そういうわけじゃ……良し、思春よ……祇柳と手合わせをしろ」

「……はっ！」

俺と甘寧は手合わせをするために距離を取る。

俺は剣を抜く。甘寧はまだ剣を抜いていない。

何かあるのだと思い、俺はただ目で見て、耳で聞く事に集中する。

静寂が漂う。

そして、甘寧が動いた。

動きは速い。一瞬で間合いを詰めると首狙いに逆手で剣を振る。

「はあ！」

「おっと……」

俺は目で捉えたが、防げないと思い後ろに跳躍する。

鈴の音が響く。

首から血が少し流れた。

なるほど相手の隙を突き、一瞬でけりをつけるタイプか……。

おっと、また動いた。

甘寧は様々な方向に走る。

撹乱か……。

目で追っても、限界が来るな……。

俺は目を瞑る。

呼吸と足音と鈴の音が聞こえた。

「そこだ！」

俺は剣を振るう。

「くっ！」

俺は甘寧の剣を弾いた。

甘寧の動きが少し止まった。

ここだ！

俺は孫堅の戦闘技術を再現して剣を振る。

防御を捨て獰猛に激しく剣を振る。

「うおおおおおおお」

「くうぅぅぅぅ」

甘寧は俺の剣を防ぐ。

俺を構わず剣を振る。

そして大きく踏み込んで体重をかけながら剣を振り上げ、振り下ろす。

甘寧はそれを防いだ。

鍔迫り合いとなるが……。

「舐めるな！」

甘寧は俺の腹を蹴る。

俺は吹っ飛んで地面に身体を打ちつけた。

甘寧はその隙をついて倒れている俺に剣を突きつける。

「そこまでじゃ」

甘寧は祭の号令を聞くと、剣を納めた。

やはり孫堅の戦闘技術は力が無いと防がれやすいか……隙も出来る。

だが、甘寧の戦闘技術は覚えた。

俺は立ち上がる。

「甘寧……速いな……良かったら真名を預かってくれ　琥音だ。」

「ふん……最後の攻めは見事だった……真名は思春だ……祭様の副将になるならもっと励め」

「ああっ、勿論だ……」

「思春様が預ける私も……明命です」

「琥音だ……よろしくな」

「はい！」

明命は明るく返事をしていた。

「次は明命とわしじゃ……」

「はい！」

俺と甘寧は二人から離れ休憩する。

明命は鞘に納めたまま直刀を構える。

祭も剣を構えていた。

そして、明命の殺気が消えた。

思春も殺気は薄い方だったが、明命の殺気は意識しないと感じないぐらい薄かった。

呼吸を聞いていたが、中々小さい。

そして走り、直刀を振る。

祭はそれを防いだ。

速さは甘寧より遅いが、俺ならぎりぎりで避けるしかないだろう。

そして、祭は剣を振る。

明命はそれを避け、離れるとまた向かっていく。

二人の剣舞が続く。

明命は思春と同じく相手の隙をついて、一瞬でけりをつけるタイプだ。

祭は経験による勘で防ぎ、また虚の隙を見せて明命の斬撃を誘導する。

そして、明命が攻めるにつれてできた隙をついて剣を振る。

明命は何とか防いでいたが、祭は猛攻をしかけて明命を追い詰める。

そして、明命の直刀を弾き飛ばした。

なるほど、斬撃を誘導するか……それと猛攻のときの体捌き……良い物覚えさせてもらった。明命の戦闘技術もだが……。

「良し、少し休憩をはさんで思春と明命よ……わしとお主たち二人で手合わせじゃ……龍牙は見て学べ」

俺はその言葉の通り、三人の戦闘技術を覚えることにした。

「良し、ここまでじゃ……」

『ありがとうございました』

「いろいろ学ばせてもらった……ありがとう」

そして、俺たちは庭から去っていた。

俺は飯を食べた後、覚えた祭と思春に明命そして戦闘技術を身につけるための訓練をしていた。

覚えた技術はすぐ身につけないと意味が無い。

俺はひたすら繰り返し身につける。

「組み合わせてみるか……」

覚えた孫堅と祭と思春に明命の戦闘技術を組み合わせていく。

技術は組み合わせることで新しい技術となる。

どうしても力などは無理だからな。それを他の技術で補う。

俺が実力のある武将と戦うためにはそうするしかない。

傭兵の初陣

あれから少し時は経ち、俺は祭によって基礎から鍛えさせられた。

確かに技術についていけなければ意味が無い。

俺も熱心にやっていく。

体力や筋力をつけながら、氣の練り方も習った。

祭が兵の訓練でできないときには自由で俺は身体を鍛えながら、技術を身につけるための訓練と組み合わせる訓練をしていた。又、相手の動きを思い出し、想像しながらその相手と戦ったりもした。

それによって思春や明命に勝てるようになり、祭とは互角ではないが、少しは良い勝負が出来るようになった。

そういえば虎蓮（フーレン）さんの娘である雪蓮（真名は預かっている）とも戦った。

虎蓮（フーレン）は孫堅さんの真名だ。

雪蓮の技術は虎蓮さんと似ていた。

俺は明命の気配遮断から思春の加速へと移って剣を振るったり、力を補った孫堅や祭の体捌きや元々の戦闘法である守備や先読みをしての誘導などいろいろとやったのだが……雪蓮も孫堅の娘で天才だった。　すぐに状況を覆されて負けてしまった。

虎蓮さんとも何度か戦ったが……強すぎる。翻弄すらできない。
想像でも勝てないしな。
又、手合わせを何度かするうちに真名を預けられた。
雪蓮の妹である蓮華（孫権）と話をして、幼子である小蓮（孫尚香）と交流をした。
ああ、そういえばこんな事もあった。
俺は自由訓練をしていた。
「すまない……少しこちらにきてくれないか？」
「何でしょうか？」
俺を呼んだのは眼鏡をかけた長い黒髪の女性とその側にもう一人おっとりとした雰囲気で眼鏡をかけた女がいた。
「私は周瑜、字は公瑾だ。」
「私は陸遜、字は伯言です～」
「俺は祇柳、字は罫空だ。何か用でも？」
「ああっ、敬語は良い。お前の事は祭殿から聞いているからな……
一度見たものや聞いたものを忘れず覚えると言うのは本当か？」

「本当だが？」

「では、本の内容なども覚えられるのか？」

「やったことはないから分からないが……多分出来ると思う」

「じゃあ、見せてもらって構いませんか～」

「別に良いが……」

こうして俺は周瑜と陸遜と一緒に書庫に向かった。

結果からいえば俺は本の内容なども覚えれた。

すると二人の眼の色が変わって、部屋に監禁され軍略や様々な知識や政務のやり方など覚えさせられ、強制的に仕事を手伝わされた。

この後、二人の真名を教えてもらったが……。

ちなみにこの事を言ったのは祭さんだった。仕事をさぼって、こっそり酒を飲んでいたときに見つかり怒られる前に俺を売ったのだ。

それを聞いた翌日……。

「祭さん、俺を売ったな？」

「な……何の事じゃ……」

「ふっふっふっ……さんざん政務を手伝わされたよ……夢に出てくるぐらいにな」

「それは大変じゃったの……」

「ああっ、とってもな……ところで試したい技術があるんだ……付き合ってくれるよな？」

「う……うむ」

そして……。

「さあ、逝くか……」

「字が違っておらんかの！？」

その日は勝つことができた。

また、「孫呉に仕えないかしら？」と虎蓮に言われたが、断って客将ということにしてもらった。

雪蓮は「何でよー」と文句を言っていたが……。

どうしても国に仕えるという気持ちは湧かない。

そして劉表との戦の時が来た。

俺たちは荊州に攻め入る。

目の前には劉表の軍が見える。

「琥音は初陣じゃそうじゃな……」
「ああっ、人殺しは経験あるがな」
「そうか……その時はどうじゃったんじゃ？」
「何も感じなかったな……人の死ってこんなあっさりとしたものだったんだと思ったが……」
「……」
祭さんは沈黙していた。

「琥音頑張ってね」
「ああ、雪蓮もな……」
「ええっ……」

「武運を祈ってやる」
「頑張ってください琥音さん」
思春と明命が言う。
「二人も頑張ってな……」
「策は分かっているな？」

「琥音さん、頼みましたよー」
冥林と穏が言う。
「ああっ、しっかり覚えているから大丈夫だ」
「それじゃあ、皆行きましょうか」
『おう！』
俺たちは虎蓮さんの言葉に返事をして、劉表軍に向かって行った。

俺は祭さんの側にいた。

向かって来る兵士に矢を放つ。

矢は兵士の額に刺さった。

兵士は倒れる。

俺は矢を放ち続けた。

前は弓を引くので精いっぱいだったが、今では苦にもならない。

「うむ、見事じゃ……」

「祭さんが鍛えてくれたからだ」

近づいて来る兵士が距離を詰めてきたので俺は剣に持ちかえる。

そして兵士に向かって行った。

俺は剣を振り下ろす。

兵士の頭を斬った。剣を振るって、別の兵士の首を刎ねる。
身につけた技術を使い、走り、斬り、避けて、防いで、弾く。
目や耳を使って、周囲を警戒もする。
そしてまた斬る。
祭さんも兵士たちに矢を放ち、殺していく。
兵士たちは撤退していく。
「お前たち退くな……戦わんか！」
あれがこの部隊の将か……。
俺は将に近づく。
「何だ貴様は！」
「俺は孫呉の客将祇柳だ……一騎打ちを申し込む」
「いいだろう……後悔するなよ？」
相手の将は俺に向かって来た。槍で貫こうと突きを放つ。
俺はそれを避ける。
再び突きが放たれるが、俺には相手の動きが読めるし反応も出来る。

本当、祭さんには感謝だな……。

こんな程度の相手の戦闘技術など覚えてもしょうがない……。

避け続けることで焦りがでた将の隙をついて、殺気を消しながら素早く後ろに回り込む。

将は俺を急に見失った事で混乱していた。

俺は後ろから剣を振るって首を刎ねた。

「敵将……この祇柳が討ち取った！」

俺は相手の首を持って叫ぶ。

祭さんの兵士の歓声と敵の兵士の悲鳴が響いた。

「初陣で敵将の首を取るとは大手柄じゃな……」

「祭さんが譲ってくれたんだろ？」

「いや、それは間違いなく琥音の手柄じゃ、誇ると良いぞ」

「ああ……」

俺たちはさらに攻め込み、劉表軍は撤退していった。

俺たちはそれを見て自分たちの陣地に戻る。

虎蓮さんは黄祖を追っていた。

俺たちは帰ってくるのを待っていたのだが……。

虎蓮さんは兵士たちに運ばれてきた。

黄祖が罠を仕掛けていたのだ。落石で虎蓮さんは瀕死の重傷を負った。

もう死ぬしかないだろう……。

『母さん！』

雪蓮は急いで駆け寄る。

「油断したわ……私はもう駄目ね」

「そんな……」

雪蓮や孫呉の将たちは泣きそうだ。

俺は傭兵としての初陣で初めての雇い主が死ぬことにやるせなさを感じていた。

戦場というのは残酷だ……。

「雪蓮……これからはあなたが王よ……この南海覇王を託すわ」

「はい、母さん」

虎蓮さんから雪蓮は剣を受け取る。

そして、虎蓮さんは次々に孫呉の将に遺言を残していく。

「琥音……」

「ああっ……」

「あなたの手柄を聞いたわ……良くやってくれたわね」

虎蓮は微笑む。

「いや、大したことじゃないさ……それに今の俺があるのも虎蓮さんが居たからだ」

この人が居なければ俺は祭さんに鍛えてもらうことも出来ず、また戦闘技術を覚えることもなかった。

「そう……これから雪蓮たちを支えてあげてくれないかしら？」

この場合俺は嘘でも分かったと応えるべきなのだろう……。

だが俺は……。

「悪い……俺は国に仕えるのは無理らしい。気楽に傭兵をやってるほうが性にあってるしな……」

「それは残念ね……」

「だが、力を貸すべき時には貸そうと思う。傭兵としてだが……」

「頼むわね……」

「任せろ……だから安心して眠ればいい」

「ふふっ……ありがとう……」

「皆……私は向こうで見守っているからね」

そして、虎蓮は永遠の眠りに着いた。

雪蓮や孫呉の将は自分の天幕に戻った。

「……」

俺は夜空を見上げる。

旅を始めようか……。

俺はその前に雪蓮の天幕に入る。

雪蓮は酒を飲んでいた。

「よう、雪蓮……」

「琥音……」

雪蓮は悲しみをこらえた顔をしていた。

「雪蓮……泣いて良いんだぜ？」

「駄目よ……私は王なんだから……」

「そうか……俺にはただの女に見えるぜ……それに俺は孫呉の将じ

ゃないしな」

「……」

「俺の前では泣けよ　王として家臣や兵たちにみっともない姿を晒せないという気持ちは分かるが……ここなら誰も聞かない。酒で気を晴らすより健全だしな」

「琥音……」

「俺がお前の悲しみを受け止めてやるよ」

雪蓮は俺に抱きつき、顔を胸に埋め泣いた。

「うわあああああ」

俺は頭を撫でてやる。

「よく我慢したな……」

俺は両親が死んだときは泣けなかった。こんなもんなんだと言う気持ちだけが残った。

死に対して無関心なのだろうな。

雪蓮の泣き声を聞きながらそう思った。

雪蓮は泣き疲れたのだろう。いつの間にか眠っていた。

雪蓮を抱えて布団に置いて眠れるようにする。

俺は天幕を出た。

「行くのか……」

俺が祭さんの天幕に行こうとすると祭さんは外にいた。

「ああっ、仕事は終わったしな……雇い主が死ぬとは思わなかった

が……」

「そうか……これは報酬じゃ」

祭さんは俺に袋を投げる。

拾って見ると中には路銀が入っていた。

「こんなの受け取れねえよ……」

「いや、お前は良く働いてくれた……策殿の悲しみを吐き出してくれたしのう」

「それは虎蓮さんの願いを叶えられないことに対するお詫びだ……俺に報酬を受け取る資格なんてない」

「餞別でもあるのじゃが……琥音、お前はもっと強くなるじゃろう……そしてその姿をわしに見せてほしい。お前の師としての願いじゃ。旅に出るなら路銀も必要じゃろ？」

「……分かった、受け取る。俺はもっと強くなるぜ……虎蓮さんの戦闘技術は俺の中でしっかりと生きている……これから祭さんたちは大変だろう。今は力を貸せないが困った時は言ってくれ。金は貰うが力を貸すぜ」

「期待しておるぞ……」

「ああ……」

俺は陣地から去っていた。

傭兵の初陣（後書き）

琥音が覚えている戦闘技術。

剣術　虎蓮、雪蓮、祭、思春、明命。

速さ　思春

気配遮断　明命

弓術　祭

傭兵は凄腕に……。

今、時代は動乱の時を迎えていた。

腐敗する漢王朝に不満を持った民衆が賊となり暴れ出したのだ。

頭には黄色い布をつけているのが目印だ。

数は多く、まさに一大勢力となっている。

各国の諸侯たちは立ち上がり、討伐するため戦っていた。

傭兵な俺としては戦が多くなる分儲かるからありがたいがな……。

俺は剣を振るい、賊の首を刎ねる。

周りにはまだ賊がいる。

俺はただ剣を振るい、賊の首を刎ね、腹を斬り、頭を両断する。

気づけば賊たちの死体だけが転がっていた。

さて、雇い主の所に戻るか……。

俺は雇い主の陣地に戻るため戦場を去った。

俺は雇い主のいる天幕に入る。

「あら、遅かったですわね琥音さん」

「思った以上に数が多くてな……まあ、仕事は果たしたぜ。麗羽」
俺の雇い主が言う。
「琥音さんお疲れ様です」
「兄貴お疲れー」
「お前たちもな……猪々子、斗詩」
俺の目の前には三人の女が居る。
冀州の州牧である袁紹（麗羽）。
袁紹に仕える武将である文醜（猪々子）に顔良（斗詩）だ。
俺は旅を続け、今は冀州の州牧の袁紹に雇われている。
「これで冀州周辺の賊たちはほぼ討伐出来たな」
「ええっ、まあわたくしたちにかかればこんなの赤子の手を捻るようなものですわ　おーっほっほっほ」
麗羽は高笑いをしていた。
俺たちは冀州の城へと戻った。
そして、冀州の賊を討伐した翌日……。
「それじゃあ、俺はまた旅に出る……報酬多目にくれてありがとう

な麗羽」

「ええっ、琥音さんは良く働いてくれましたし当然ですわ……」

「兄貴本当強いよな……あたいと斗詩が二人がかりでなんとか勝てるぐらいだったのに……今じゃあ敵わねえもん」

「そうだね文ちゃん……琥音さん、今までありがとうございました」

俺が旅に出ることを伝えると三人は見送りをしてくれた。

「何度も言いますが、わたくしに仕える気は無いんですの？　金ならいくらでも出しますわよ？」

「悪いな……今は諸国を見て回りたいと言うのもある……まあ、追々考えておくぜ」

「琥音さんならいくらでも歓迎しますわ」

「おう、あたいもだぜ兄貴」

「私もです」

「ははっ、ありがとうよ……仕えることは無くても金さえ貰えればいくらでも力は貸すぜ……じゃあな」

俺は歩き出した。

麗羽は名家の笠を着てるところがあり、わがままでもあった。
猪々子や斗詩が何とか支えている……斗詩のほうが苦労してるな。
まあ、別に悪いやつでも無いし……金の払いも良いから俺は好きだ。
猪々子や斗詩も中々良い奴らだしな。
俺は猪々子や斗詩の戦闘技術を覚えた。
まあ、二人のような馬鹿力はないから大剣も大槌も振り回せないが……。
それと支払われた報酬によって、剣を新しい物に変えている。
今まで使っている剣より幅広く肉厚で、重量もあって頑丈でもある剛剣だ。
ある程度重い方が力もつくだろうしな……斬り合って折れても駄目だ。
さて、次は幽州に行くか。
俺は幽州の公孫?の城に向かった。
俺は今、玉座にいる。

目の前には公孫？と水色の髪をした白い着物の女がいた。
雰囲気からただものではないと分かる。
「それで……お前は客将として雇って欲しいと言ったな？」
公孫？が俺に問う。
「ああっ、俺は傭兵でしてね……金さえ貰えれば力の限り働きます……俺は凄腕ですし、雇って損はさせませんよ？」
「ほう、自信たっぷりですな？……私が確かめましょう　伯珪殿」
「ああっ、頼む。ところでまだ名前を聞いてないんだが……」
「俺の名前は祇柳です。字は罫空」
「じゃあ、祇柳……そこにいる趙雲と手合わせをしてくれ」
「我が名は趙雲、字は子竜……白蓮殿の客将になっている。手合わせ願おうか。祇柳殿」
白い着物の女（趙雲）が言う。
「分かりました……お手柔らかに」
「それはどうでしょうな？」
そして、俺と趙雲は公孫？が見ている中庭で手合わせをする事になった。
俺と趙雲は武器を構える。

趙雲の武器は二又の槍だ。
槍の達人に会えるとは幸運だな。
俺は剣を右手で抜き、逆手に持ち変える。
「それじゃあ、始めましょうか？」
「ああっ、私はいつでも良い」
「良し、始め！」
公孫？が合図をする。
俺は気を含む自分の気配を消しながら、趙雲に向かっていき、首を狙って剣を振る。
「くっ！」
趙雲は後ろに跳躍して避ける。
剣が首を掠めた。
これを避けるとは……やはり、そこいらの奴とは違うな。
俺は剣を順手に持ち替えて、両手で構える。
「速いですな……今のは危なかった」
「そうですか……」

「次はこちらから！」
趙雲が俺に向かって来た。
そして槍で頭狙いの突きを放つ。
速度は速い。
俺はそれを避ける。
「ほう、わが槍を避けるとは……自信たっぷりなだけはあるようだ」
「いやいや、ぎりぎりですよ」
俺は趙雲の動きを見て、呼吸を聞く。
そして覚える。趙雲の戦闘技術を……。
俺は趙雲の槍を避け続ける。
「おや、反撃しないのですかな？」
「隙が無いですからね……まあ、そうさせてもらいますよ」
趙雲が槍を引き、左足を踏み込んで突きを放つ。
俺はそれを先読みして槍に向かって剣を右に振る。
どんな速さや力も勢いを殺せば防げる。

槍を弾いた。

「む……」

趙雲は再び突きを放つ。

俺は先読みしてそれを弾く。

「今のはギリギリでした……くっ！」

わざと脱力して隙を作る。

「隙あり！」

趙雲は突きを放つ。

「おっと……」

俺はそれを先読みしながら突きを誘導して防ぎ、隙を大きくしていく。

「もらった！」

趙雲は大きく足を踏み込み、筋肉を軋ませて最高の一撃を放つ。

それが大きな隙となる。

俺は趙雲が突きを放つ前に動き、左袈裟切りを放つ。

「な！？」

趙雲はそれをなんとか防ぐ。

俺はそのまま自分の呼吸、足の踏み込み、剣の振り、動きを変えながら猛攻をかける。

「くぅぅぅぅ！」

「はあああああああ」

趙雲は後退しながら俺の剣を防ぐが、動きに対応しきれず体勢をくずして隙が出来る。

俺は剣を大きく振り上げ、足を大きく踏み込み、体重をかけながら振り下ろす。

「ぬぅ！」

趙雲は槍で何とか防いだが、槍は剣を止めれず弾かれる。

後ろに跳躍して趙雲は俺から離れた。

「今まで本気じゃなかったようですな……」

「そんなことはありません……これでも結構必死なんですよ？」

「……」

趙雲は槍を構える。

そして、俺に向かってきた。

足を大きく踏み込み、筋肉を軋ませる。

「そちらは本気というわけですか……」

さっきよりは隙も無くなっている。

「はい！　はい！　はいぃー！」

叫びながら高速の三段突きを放つ。

先ほどの突きより速い。

だが、筋肉の動きや足さばき、呼吸によって先読みする。

一撃目、顔狙いの突き。

首を傾げて避ける。

二撃目、左肩を狙った突き。

俺は右に避ける。

三撃目　避けた隙を狙って、俺の顔の右側面を貫こうとする。

俺は獣のように大きく左に走って避け、趙雲がこちらを見る前に、

気配を消して静かに走りながら後ろに回り込む。

「これで終わりです」

「！」

俺は後ろから趙雲の首に剣を当てている。

「参った……」

俺は剣を引いて、鞘に納める。

「まさか星に勝つなんて……」

「どうです？……雇ってもらえますか？」

「ああっ、よろしく頼む」

俺は公孫？と握手をする。

「祇柳殿、大した腕だ……我が真名を受け取ってもらえますかな？」

「分かりました……俺も真名を預けましょう」

「我が真名は星だ……よろしく頼む」

「俺の真名は琥音……こっちこそ」

俺と星は握手をした。

「私の真名も預かってくれ……白蓮だ」

「琥音です……敬語じゃなく素で喋って良いですか？」

「ああっ、構わない」

「それじゃあ、これからよろしくな……白蓮、星」

俺が言うと二人は頷いた。

傭兵　仁の王に会う

白蓮に雇われて数日が経った。

あれから何となく白蓮と白蓮が率いる白馬陣の訓練を見せてもらった。

俺は白蓮の馬術を覚え、白蓮に頼んで馬を借りて身につけるための訓練をした。

今ではすっかり乗れるようになっている。

まあ、戦場では乗らないがな……。後は趙雲の戦闘技術である槍術も身体に染みついてきた。

俺と星と白蓮は賊の討伐に向かう準備をするため玉座にいたのだが……。

「公孫？様！……あなたの親友と名乗る者が兵を多く率いれて、あなたに会わせてくれと言っておりますが……」

兵の一人が報告する。

「何？……分かった。通してくれ」

白蓮は玉座に呼ぶよう兵に言う。

「良いのか？　刺客かもしれないぜ？」

「大丈夫だ。もしもの時は星と琥音が守ってくれるんだろ？」

「まあな……」

「当然」

俺と星は後ろに潜んで様子を見ることにした。

俺は弓を構えて、矢を番える。

そして、玉座に現れたのは三人の女性。

一人は薄い桃色で髪を二つに分けている女。

一人は長い黒髪を後ろで纏めている女。

一人は赤い短髪に首に赤い布を巻いている少女だ。

長い黒髪の女と赤い短髪の少女からは只者ではない雰囲気があった。

「桃香！　ひっさしぶりだなー！」

「白蓮ちゃん、きゃー！　久しぶりだねー」

白蓮は薄い桃色で髪を二つに分けている女に向かって言う。

薄い桃色で髪を二つに分けている女もそれに答える。

どうやら知り合いらしいな。親友というのは嘘ではないようだ。

俺は弓と矢を背中に戻した。

白蓮は薄い桃色で髪を二つに分けている女と会話をしている。

どうやら三人は白蓮を頼って賊の討伐に参加したいらしい。

兵を多く率いれたのは嘘で、一人も居ないとの事だ。

思い切ったことをするもんだ……。

「今私と行動してくれているのは愛紗ちゃんと鈴々ちゃんの二人だけなんだ……」

そして、後ろの二人の女が自己紹介する。

「我が名は関羽。字は雲長。桃香様の第一の矛にして幽州の青龍刀。以後お見知りおきを」

長い黒髪を後ろで纏めている女が言う。

「鈴々は張飛なのだ！　すっごく強いのだ！」

赤い短髪に首に赤い布を巻いている少女が言う。

白蓮は二人の力量に疑問を持っているようだ。

星が白蓮たちの前に玉座の後ろから姿を現す。

俺もそれについていく事にした。

「人を見抜けと教えた伯珪殿が、その二人の力量を見抜けぬのでは話になりませんな」

「確かにな、相手の力量を見抜くというのは大事なことだな……」

「むぅ……そう言われると返す言葉も無いが、ならば趙雲や祇柳はこの二人の力量が分かるとでも言うのか？」

「まあな……この二人は中々腕が立つようだぜ」

「武を志す者として、姿を見ただけで只者では無いことぐらいは分かるというもの」

「へえ～……まあ、星や琥音がそういうならば、確かに腕が立つんだろうな」

「ええ。……そうだろう関羽殿」

星は関羽に言う。

「そういう貴女も腕が立つ……そう見たが？」

関羽はそう返す。

「そっちのお兄ちゃんも腕が立つようなのだ」

張飛が言う。

「ふふっ、さて……それはどうだろうな」

「まあ、そこそこは自信があるがな」

俺たちはそう返した。

白蓮は薄い桃色で二つに分けている髪の女と関羽と張飛の参加を認めた。

そして賊の討伐に向かうため城外に集合する。

「すごーい！　これ皆、白蓮ちゃんの兵隊さんなの？」

「勿論さ。……とはいっても正規兵半分、義勇兵半分の混成部隊だけどな」

「そんなに集まったんだ……」

「それだけ、大陸の情勢が混沌とし、皆の心に危機感が出ているという事でしょう」

「ふむ、確かに最近大陸各地で盗賊だ何だと匪賊共が跋扈しているからな」

「いったいこの国はどうなっていくのだー」

「民のため、庶人のため……間違った方向には行かせやしないさ。……この私がな」

皆はこの大陸の事を憂いているようだ。俺にとってはどうでもいい事なんだがな……。

「……趙雲殿」
関羽が言う。
「ん？　どうされた？　関羽殿」
「あなたの志に深く感銘を受けた。……我が盟友になって戴けないだろうか」
「鈴々も、おねーさんとお友達になりたいのだ！」
「ふっ……志を同じくする人間、考えることは一緒ということか」
「……？　どういうことだ？」
「関羽殿の心の中に、私と同じ炎を見たのだ。そして志を共にしたいと……そう思った」
「友として共にこの乱世を治めよう」
「ああ！」
「治めるのだ！」
「あー！　私も！　私もだよ！」
星と関羽と張飛が握手をしているのを見て、薄い桃色で二つに分けている髪の女は急いで駆け寄り、自分の手を三人の手に乗せる。

「みんなで頑張って、平和な世界をつくろうね　大丈夫、力を合わせれば、ドーンッてすぐに平和な世界が出来ちゃうんだから」

随分とお気楽だな……平和な世界なぁ……。

「そんなに簡単なわけないのだ。お姉ちゃんは気楽なのだなー」

「ふっ、なかなかどうして。そういうお気楽さも時には必要というものだ」

「そうだな……我が名は関羽。字は雲長。真名は愛紗だ」

「鈴々は鈴々！、張飛と翼徳と鈴々なのだ！」

「劉備玄徳、真名は桃香だよ！」

「我が名は趙雲。字は子竜。真名は星という……今後とも宜しく頼む」

四人は握手をした。

「琥音殿は此方に来ないのですかな？」

星が俺を見て言う。

「そうしたいのは山々だが……生憎と俺はお前たちのような正義の心は持っていないんでな……」

「何！？……なら、お前は何のためにこの場にいるんだ！」

関羽が言う。

「言い方が悪かった。困っている奴がいたら助けるぐらいはするぞ……あくまでお前たちみたいに立派な正義心を持っていないと言うだけだ」

報酬次第だが……慈善事業じゃ無いんだ。こうでも言っとかないと襲われそうだしな。

「そうか……大陸の民を見捨てるわけではないんだな？」

「そんな事はしない……絶対にな」

俺はそんな残酷では無い。

「だったら大丈夫ですよ……えーっと……」

「祇柳だ……字は罫空。真名は琥音……今は白蓮に雇われている。幽州の民たちのために精いっぱい力を尽くすつもりだ。宜しく頼む」

仲良くなるためとはいえ、良くこれだけの嘘が出てくるもんだ。まあ、賊を討伐すれば民のためにはなるしな。

俺自身はそんなことを気にせず、金のために力を尽くすだけだ。

だが、そんな心の内は隠しておかないとな……なるべく人とは仲良くなっておいた方が良い。

「はい！　お願いします」

「ああ！」

「勿論なのだ！」

「頼りにしてますからな！」

俺は四人と握手をした。

白蓮が俺たちの輪に入れず拗ねていた。

そして、俺たちは出陣する。

俺は賊がこちらに向かって来る前に矢を放つ。

矢は賊の額に刺さった。

「良い弓の腕ですな……」

「まあな……。」

俺は星と共に戦う事になった。

俺は次々と矢を放つ。

賊は矢によって何人かの仲間を失いながらも攻めてくる。

ある程度、近づいてきたので弓と矢を背中に背負って右手で剣を抜く。

「さあ、行くか」

「そうですな」

俺は剣を構え、星は槍を構える。

そして、賊たちに向かって行った。

俺は剣を振るって賊を斬り、星は槍で賊を突き刺す。

戦場は賊の死体で埋まって行く。

やがて、賊の討伐は終わった。

愛紗や鈴々たちも活躍したようだ。

俺たちは城に戻った。

傭兵は星と……

あれから俺たちは次々と周辺の賊を討伐していった。

その結果、賊の暴動は収まり落ち着きつつある。

まあ、まだまだ出てくるだろうが……。

もうそろそろ旅を再開するか……俺が抜けても星や愛紗に鈴々が居るんだ。

問題は無いし、俺は賊の多い所に行って稼ぐとしよう。

俺はそう思いながら槍を持つ。

武器庫から拝借したものだ。槍を買っても良いが身につける場所が無い。

手にずっと持つよりは背負ったりする方が楽だ。まあ、弓や矢を背負ってるから無理だがな。

俺は星の戦闘技術を基本に今まで覚えた戦闘技術を組み合わせながら、想像上の祭さんと手合わせをしていた。

いくら目や耳が良くて、先読み出来てもそれは正確とは言えない

初見の相手に対しては先読みでなく、予測となるからだ。

ある程度戦闘技術を覚える事で先読みが可能となるのだ。

だからとにかく戦闘経験を積み、勘を磨く。
勘から予測して、避けたり、防いだりして相手の戦闘技術を覚える。
そして先読みから相手の隙を作り、持てる技術で翻弄して倒す。
これが俺の本来の戦い方だ。
様子見のために仕掛けたりもするが。

俺は祭さんに向かって槍で突きを放つ。
祭さんはそれを剣で防ぐ。
ある程度、戦っていると……。
「おや、琥音殿……槍が使えたのですかな？」
星と愛紗と鈴々が庭にやってきた。
「まあ、少し齧った程度だがな……」
「その割にはしっかりと型にはまっているようだったが？」
愛紗が言う。
「琥音のお兄ちゃん、やっぱり強そうなのだ」

鈴々も言った。

「俺からしてみればまだまだだがな……お前たちは何しに来たんだ？」

「何、少し手合わせをしようかと思ったのですが……」

「そうか、じゃあ好きにやってくれ」

俺は去ろうとするが……。

「琥音……私と手合わせしてくれないか？」

「ん？　まぁ別に良いぜ……」

そう言えば二人とは手合わせしていなかったな……。

愛紗は鈴々は兵の訓練をしていたのもあって、手合わせの機会が無かった。

俺は教えるのが柄じゃないから兵の訓練を断ったがな。俺自身兵を指揮した経験は少ない。

一人で戦ってきたのもあるしな。

俺と愛紗は手合わせするため間合いを取り、武器を構える。

俺は槍を、愛紗は薙刀だ。
側では星と鈴々が見ていた。
「それじゃあ、いくぜ？」
「ああっ」
俺は気を含む気配を遮断して、一気に間合いを詰め、足を踏み込むと額、首、腹を狙って三連突きを放つ。
「ふんっ！」
「くっ！」
愛紗は後ろに跳躍して避ける。
むっ、少し間合いを詰めすぎたか？　今まで覚えた戦闘技術は剣術が多いからな。
槍にも完全には慣れていないようだな。
「見事な突きだ……やはり齧った程度には見えないな」
「いや、大したことは無いぜ……」
「ふっ、次はこちらからいくぞ！」
愛紗は走り、間合いを詰めて左の袈裟切りを放つ。

「せやぁ！」

「おっと！」

俺は後退しながら身体を後ろに反らして避ける。

愛紗は又、踏み込んで首狙いの右薙ぎを放つ。

「まだまだっ！」

「危ねえな……」

俺は後退しながら頭を下げて避ける。

愛紗は又踏み込み、上段から振り下ろす。

「はああっ！」

「うおっと！」

俺は後ろに跳躍して避けた。

愛紗の斬撃の速さは星ほどでは無いが、力がある。

星は速さ重視なら愛紗は力と速さ両用といったところだろう……バランスが良い。

だが、戦闘技術は覚えた。

「大したもんだ……」

「私の斬撃を避けれる琥音もな……」

俺は槍を構え、間合いを詰めて愛紗の頭、首、腹、肩、手、足などあらゆるところを狙って突きを放ち続ける。

愛紗はそれを弾き、防ぎ、避ける。

俺は構わず突きを放ち続ける。

少しづつ隙を作っていきながら……。

「はあっ！」

愛紗は俺の隙を狙って薙刀を振る。

俺は愛紗の動きを先読みして、それが振られる前に槍を振って弾いた。

そして力で押し負けたようにわざと後退する。

「ちっ！」

「はあああっ！」

愛紗はただ薙刀を振っていく。

俺はそれを弾きながらも脱力して隙を作る。

そして……。

「終わりだ！」

「しまった！」

愛紗は大きく踏み込み、薙刀を振り上げて最高の一撃を繰り出そうとする。

俺は静かにその一撃を避けるために動く。

「はあああああっ！」

愛紗は薙刀を振り下ろす。

俺はそれをただ左に移動して避ける。

「な！？」

愛紗が体勢を戻す前に、俺は踏み込んで右の片手で突きを放って首に突きつける。

「終わりか？」

「降参だ……」

俺は槍を引いた。

「愛紗に勝つなんて凄いのだ……鈴々とも手合わせしてほしいのだ」

「ああっ……良いぜ」

「その前に少し良いですかな？」

「何だ？」

星がこちらに近寄ってきた。

「先ほどの琥音殿の動きが私の動きに似ていましてな……いや、そのものと言っても良いぐらいだ」

「何！？……それは本当か星？」

「ああっ、多少動きは違ってはいたがな……」

「やっぱり分かるか……正解だ、確かにお前の槍術を基本にしている」

「そうですか……」

「琥音……そういえばお前は戦場では槍を持っていなかったな？……あれだけの腕があるのにどうしてだ？」

愛紗が俺に問いかける。

「剣の方が使いやすいからな……それに槍で実際に戦うのはお前が初めてだ」

「初めてだと！？　ならば何故星の動きが出来るんだ！」

「星の槍術を覚えて身につけた……それだけだ」

「詳しく話して貰えますかな？」
星が真剣な表情で問いかける。

「分かった……俺には武の才能が無い……大きな力も無けりゃ、素早さも無い……お前たち天才から見れば俺なんか大したことは無い。だが、一つだけ出来る事があった。俺は一度見たものや聞いたものを覚えることが出来る。それを忘れることも無い」

「な！？」

「……」

「お兄ちゃん凄いのだ……」

愛紗や鈴々は驚き、星は沈黙する。

「だから俺は相手の戦闘技術を覚えて身につけることにした……幸い目や耳は良い。相手の動きを良く捉えて、呼吸をよく聞くことができるからな。俺が強くなるならそうすることが一番だと思ったからだ」

「ならば、お前の戦闘技術は……」

「今まで身につけたのを組み合わせているだけだ。良いところを抜き出してな……」

「なるほど、だから次々と変えることが出来たわけですな？」

「ああっ、もっとも身につけるには多少苦労するがな」

「我が槍術は長年の鍛錬によって会得したもの。琥音殿は手合わせの時に見ただけで我が槍術を完全に覚えたと……そして数日で身につけたと言うのですな？」

「ああっ、要点も覚えているからな……だが、槍の間合いに慣れるのは苦労する……まだ完全とは言えない」

「はっははははは……大した御方だ……」

星は笑いだした。

「私の戦闘技術も覚えたと言うのか？」

愛紗が言う。

「勿論だ……俺は使える物なら何でも覚えるし、身につける」

「ならばやって見せろ！」

愛紗は薙刀を差し出す。

「良いだろう……」

俺は薙刀を受け取る。

目を瞑り、愛紗の戦闘技術を思い出す。

そして、それに合わせながら薙刀を振るっていく。

聞こえるのは風切り音だけ。やがて何も聞こえなくなる。

「はあっ！」

俺は足を踏み出し、上段から全力で振り下ろす。

「とまぁ……今はこんな感じだ」

俺は薙刀を愛紗に返した。

「確かに私の動きだ……」

「見事ですな……」

「ますますお兄ちゃんと戦いたくなったのだ」

「ああ、やろうぜ鈴々」

俺と鈴々は間合いを取って、武器を構える。

俺の武器は剣。鈴々の武器は蛇矛だ。

さて、どういう戦い方なんだかな。

「いくのだ！」

鈴々は俺が攻める前に向かって来た。

しかし、隙だらけだ。
俺は鈴々の戦い方が分かった。
力重視だ。そして、力に頼る者は総じて勘が優れているのが多い。
だからこそ防御を捨てているのだ。
力で圧倒できるというのもある。
俺にとっては扱いやすい。
戦闘技術を覚えやすいからだ。それに先読みしやすい。
「にゃあ！」
鈴々は蛇矛を振り下ろす。
俺はそれを先読みして、剣でぎりぎり防げる範囲で弾く。
腕が少し痺れた。
やはり力重視か……。
「やるな……腕が痺れたぜ」
「へへっ、琥音の兄ちゃんには負けないのだ」
「そうか……」

鈴々は蛇矛を振る。
俺はそれを剣で弾く。
鈴々は構わずまた蛇矛を振る。
俺は弾く。
鈴々は蛇矛を振り下ろし、振り回し、突き、振り上げる。
俺はそれをただ弾いていく。完全に無力化できるところで弾いていきながら。
「これでどうなのだ！」
鈴々は振り回したが……。
隙が大きすぎるぜ。
俺は鈴々が振り回す前に、足を大きく踏み込んで全力で剣を振る。
「にゃあ！？」
鈴々の蛇矛は大きく弾かれ、鈴々はたたらを踏んで体勢を崩す。
俺はさらに踏み込み、右手に剣を持ち、全力で突きを放った。
「にゃあ！」
鈴々は後ろに跳躍して避ける。

「あ……危なかったのだ……」
「やはり避けられるか……」
やはり勘は良いようだ。
「今度はこっちの番なのだ！」
鈴々は間合いを詰めてきた。
鈴々は突きを狙う。
俺は剣を逆手に持ち、気配を消す。
「にゃあああああっ！」
鈴々は突きを放った。
俺はその前に、左に避けれるよう静かに動く。
そして、突きを避け、鈴々が突きを戻す前に後ろに回り込んだ。
「にゃあ！？　どこに消えたのだ？」
「終わりだ……」
俺は鈴々が振り向く前に首に剣を当てる。
「にゃあ、負けちゃったのだ……」

「ああっ、俺の勝ちだ」
俺は剣を鞘に納める。
「お兄ちゃん強かったのだ……」
「鈴々の猛攻を防ぐとは……あれも技術によるものだというのか」
「見事な技術でしたな……十分琥音殿は天才と思いますが」
「いや、俺は凡人さ」
俺は庭から去っていた。

夜になり、俺は部屋にいたのだが……。
部屋の扉が開いた。
「琥音殿……一緒にどうですかな?」
星が酒を持って、現れた。
「良いな……誘いを受けるとしよう」
「では、此方へ」
俺と星は部屋から出て、庭へと移動する。

夜空を見ながら酒を飲み始めた。
「つまみはどうですかな？」
「どんなつまみだ？」
「めんまです」
星は小壺を取りだした。
中にはめんまがあった。
「まあ、頂くぜ」
「存分に召し上がってくだされ」
俺と星はめんまをつまみに酒を飲む。
「なかなかいけるな……」
「気に入りましたかな？」
「まあ、少しな」
「それは何より……」
大分、酒も減ってきた頃。
星が俺の肩にしなだれかかる。

「どうしたんだ星？」
「少し酔ってしまったようです」
その割には顔は赤くない。
「そうか……このままが良いか？」
「ええっ……」
俺と星はしばらくの間静寂していた。

「琥音殿……責任取ってもらえますかな？」
星が口を開く。
「何の事だ？」
「我が槍術を盗んだではないですか……」
「人聞きが悪いな……ただ覚えただけだ」
「ですが、我が槍術を使っていたではありませんか」
「使える物は何でも使うさ……分かった、どう責任を取れば良いんだ？」
「おや、鈍いのですかな？」

「……本気か？」

「私はいつでも本気ですぞ……」

「魅力的な誘いだが……俺は気が多いぜ？」

「英雄は色を好むと言う物……別に気にしませぬ」

「後悔するかも知れないぞ？」

「たとえ、どんな事があろうとこの気持ちは変わりませぬ」

俺は問いかけるが、星は真剣に答える。

「正直言ってあなたが羨ましい……私が鍛錬を積んで会得した槍術を見ただけで覚え、数日で身につけてしまった。そして、あなたの技術に惹かれている自分が……あなたを深く知りたいと思う自分が居る。この気持ちを受け取っては貰えぬのですか？」

星は俺の顔を目を逸らすことなく見つめる。

「……」

俺は星の顎を掴んだ。

「っ！……琥音殿？」

不安そうに星は俺を見つめる。

俺は星の口に自分の口を合わせる。

接吻だ。

そして、舌を出すと星の舌に絡ませていく。

「ん……ちゅ……く……ふ……」

星は力を抜き、俺に任せていく。

「は……ん……うん……んん」

そして、俺は口を離した。

「ん……はあっ……はあっ……はあっ……琥音殿……」

星は頬を染めながら俺の顔を見つめた。

「今は此処までだ……俺は傭兵だからな……賊たちが蔓延っている今の世じゃあ稼ぎ時だ。仕事を優先しちまう。夜が明けたら旅に出るしな」

「それでは私も……」

「いや、お前が抜けたら白蓮も桃香たちも困るだろ？　心配するな又会えるさ……」

「しかし……」

星は不安な表情になる。

「星……俺は絶対にお前の気持ちに応えるし、責任も取るさ。だが、今は世が乱れているからな。

落ち着くまで待とうぜ……そして又会った時にまだお前が俺を求めるなら……」

「その時は……」

星が顔を近づけながら言う。

「俺もお前を求める……」

俺も顔を近づけた。

そして、どちらからともいうことなく接吻を交わした。

「それじゃあ……中々上手い酒だったぜ……ありがとうな」

「こちらこそ……」

俺は部屋に戻るため歩き出す。

星……俺には勿体ないぐらいの女だよ。お前はな……。

だが、俺を想ってくれるその気持ちは受け取ったぜ。

かならず応えてやるからな……。

俺は部屋に戻るとしばらく星の事を考えながら眠った。

傭兵は依頼される

俺は白蓮に旅に出ることを言い、今までの働きの報酬を払ってもらった。

白蓮や桃香と愛紗に鈴々そして星の皆が見送りをしてくれた。

「じゃあな……俺はもうちょっと賊がいる所に行って来るぜ」

「ああっ、達者でな琥音……お前がいてくれて助かったよ」

「また会いましょうね琥音さん……」

「ああっ、又会おうぜ」

白蓮と桃香の言葉にそう返す。

「琥音、私は絶対にお前より強くなってみせる」

「鈴々も次は負けないのだ」

「ふっ、俺もそう簡単に負けるわけにはいかねぇよ」

愛紗と鈴々の言葉にそう返した。

「琥音殿……」

星が此方に近づいてきた。

俺は星と抱き合う。

そして、顔を近づけ、接吻をした。

「待っておりますぞ……」

「ああっ……」

そして星から離れた。

「……」

「うわぁー」

「……」

「にゃあー」

白蓮たちの顔が赤くなっていた。

「まだまだ賊は出て来るだろうが大丈夫だ。又、いつか会おうぜ……」

俺は右手で会釈をすると、そのまま去っていた。

俺は次の国を目指して歩いていた。

風の噂で賊の名前は黄巾党になったらしい。

まあ、名前などどうでも良いことだ。

俺は旅する途中で村や街に寄って休憩し、襲って来る賊たちを退治

していた。

無論、報酬を貰うことを条件にしてだ。

さて、ここらへんで休憩するか。

俺は目の前の街に立ち寄る。

「待て、お前は何者だ！」

門前に銀髪を後ろで三つ網にしている傷だらけの少女が言う。

両腕には鉄鋼を装備している。

「何者とはご挨拶だな……相手の事を聞くときはまず自分から言うべきだと思うんだがな？」

「貴様……さては黄巾党の仲間だな？　退治してやる！」

銀髪の女は襲いかかってきた。

「俺は黄巾党じゃないぜ……」

俺は勘違いを正そうとしたのだが……。

「黙れ！」

銀髪の女は俺の言葉に耳を借さなかった。

そして、俺に向かって右の拳を放つ。

中々の速さだが、虚実も無く読みやすい。
先読みするまでも無く、俺はそれを右に避ける。
「はあっ！」
女は左拳を振る。
俺は後退して避ける。
「はあああああ！」
女は身体を捻りながら、右足を上げながら回転するままに　俺の頭部に蹴りを放つ。
「おっと！」
俺はそれを両手で掴んで防ぐ。
「なっ！？」
「これ以上は止めとけ……今ならまだ遊びとして許してやるぞ？」
俺は足を踏み込むと、俺は少女の足を押す。
「うわっ！」
女は体勢を崩して、後ろによろけるが何とか踏ん張った。
「くっ……まだだ！」

女は右足を後ろに振り上げた。
何をするつもりだ？
「はあああああ」
女は叫ぶ。右足が光り輝いた。
氣だ……そして女の体勢で俺は気づく。
「くらえ、猛虎蹴撃！」
女は右足で蹴るように振る。
球体状の気が放たれた。氣弾か……。
祭さんが教えてくれたのは氣を練って、肉体を強化する事。
まさか氣にこんな使い方があるとはな……。
良いもん覚えさせてもらったぜ。
俺は氣弾を右に移動して避けた。
後ろで爆発音がした。
「まさか……あれを避けるなんて……」

女は驚愕していた。

「さて、もう冗談では済ませなくなったぜ？」

俺は剣を抜く。

「くっ！」

女も構える。

そして、俺は間合いを詰めようとしたが……。

『二人ともちょっと待つんや（待つの～）』

門の中から二人の女が現れた。

一人は紫の髪をおさげにした露出の高い服装をしていた。

もう一人は三つ網に眼鏡を掛けていた。

「真桜、沙和！何しに来たんだ！」

どうやら銀髪の女の知り合いらしい。

俺は様子を見る。

「何しに来たって……あんたを止めに来たんや！」

「凪ちゃん落ち着くの～」
紫の髪の女と三つ網に眼鏡を掛けていた女は銀髪の女を説得する。
「何故止めるんだ！……あいつは黄巾党の仲間だぞ！」
「阿呆！　良く見てみんかい！」
紫の髪の女の言葉を聞き、銀髪の女は俺を良く観察する。
「見たがどうした？」
「まだ分からんのかい……このお兄さんどこにも黄色い布巻いて無いやろ？　黄色の黄の字もあらへんがな……っていうか青やし」
「凪ちゃん……黄巾党は絶対どこかに黄色い布を巻いているの～。でもこのお兄さんはどこにも巻いてないの～」
「……あ！」
「今頃、気づいたんかい！」
俺はそれを見て、剣を納めた。
「さて、誤解も解けたようだし、話をしてもらおうか？」
『は、はい！』
三人の女は俺の問いに即答する。

「本当に申し訳ありませんでした！」

銀髪の女。名を楽進、字を文謙という女は頭を下げる。恥ずかしいのか頬が紅潮している。

「いやー、本当すんまへんなぁ……祇柳はん」

紫のおさげ髪の女。名を李典、字は曼成という女は気まずそうにしていた。

「ごめんなの～、祇柳さん」

三つ網で眼鏡を掛けた女。名を于禁。字は文則という女も気まずそうにする。

彼女たちは大梁義勇軍で黄巾党の襲撃からこの街を守っているらしい。

「本当なら……迷惑代として金を取るんだが、良い技を見せてもらったんでな……今回は許してやる」

「ありがとうございます！」

楽進は又、頭を下げる。

李典や于禁も安心した表情をしていた。

「祇柳様……勝手とは思いますが、私たちに力を貸してくれません

か？」

「祇柳はんは腕ききのようやしな……お願いや」

「お願いするのぉ～」

三人は頭を下げた。

「力を貸すのは構わんが……報酬は出せるのか？」

「すみません……今の状態ではお金などは……」

「そうか……」

俺は立ち上がり街から出ようとした。

「待ってください！　お金などは出せませんが……私たちに出来る事なら何でもします……だから……」

「何でもか……」

俺は楽進に近づき、顎を掴んだ。

「！」

楽進の身体が強張る。

俺は顔を近づけた。

「こういうことでもか？」

「なっ！？　祇柳はん！」
「祇柳さん、駄目なの！」
李典や于禁が動こうとする。
「お前たち来るな！」
『凪　（ちゃん）！？』
楽進は叫んで二人を止める。
「私でこの街が助かるのなら……」
楽進は目を瞑る。
その身体は震えていた。
「……何てな」
俺は手を離して、楽進の頭を撫でる。
「あっ……」
楽進は目を開けた。
「何でもなんて気軽に言うことじゃないぜ？……だが、覚悟は分かった」
「じゃあ……」

「ああっ……力を貸すぜ。ただし条件は三つだ」

「何でしょうか？」

「一つ目。救援を求めた事からもうじきこの街がある州の役人が来るよな？　そのときに俺が雇われるように言うこと。二つ目。この街にいる間の食事の提供。三つ目。寝床の提供だ。」

「それで良いんですか？」

「ああっ、怖がらせて悪かったな」

俺は又、凪の頭を撫でた。

「いえ、ありがとうございます」

「祇柳はん……ビックリさせんといてえなぁ……」

「心臓止まるかと思ったの……」

「本当に悪かったな……俺の真名は琥音だ。宜しく頼むぜ」

「私の真名は凪です。宜しくお願いします琥音様」

「うちの真名は真桜や。よろしく頼むで」

「沙和の真名は沙和なの～。よろしくするの～」

こうして、俺は三人と一緒に街を守ることになった。

俺は部屋で凪の戦闘技術を身につけるための訓練をしていた。
足を踏み込んで、拳を前に突き出す。
そして回転しながらの蹴りを放つ。
体術は中々、やりやすい。応用するとしよう。
氣弾の訓練もした。放った氣弾の制御が難しい。
ちなみに窓を開けておいてから、森に放っている。
だが、これも応用で何とかなりそうだ。
しばらくすると訓練を止めて、休憩する。
「琥音様……氣が使えたのですか？」
凪が来た。
「まあな……練ることは出来るんだが、氣弾を撃つのは苦手でな……訓練中さ」
「そうですか……」
「ああっ、そうだ……で？　何しに来たんだ？」

「わ……私はその……見張りの休憩を……」

「そうか……お疲れ様」

「いえっ、私は別に……」

「凪は頑張っていると思うが？」

「そんな……」

凪は顔を赤くしていた。

「あの、琥音「大変や！」」

凪が何か言おうとしたが、真桜の声に遮られる。

「どうした？　真桜？」

「黄巾党が現れたんや！」

「それじゃあ行くぞ……凪！」

「はい！」

俺と凪は部屋から出て、黄巾党を迎撃するため門前で待つ。

さて、仕事を始めるか。

傭兵は覇王に会う

俺は黄巾党に向け、矢を放つ。

矢は黄巾党の額に突き刺さった。

俺は遠くから黄巾党を弓で狙撃している。

少しでも時間を稼ぐためだ。防護柵も門前に置いてある。

凪たちも東西南北の門前で戦っていた。真桜は回転する槍を使う（彼女いわくからくりによるものらしい）　沙和は双剣を使っている。

俺が守っているのは南門だ。　黄巾党たちの動きも収まりつつある。

これなら何とかなりそうだ。

とはいってもそろそろ矢が尽きてきたな……。

俺は仕方なく、剣を抜きながら門前の防護柵から前に出た。

そして、向かってくる黄巾党の動きを先読みして最小限の動きで斬り殺していく。

ある程度斬り殺していくと……。

銅鑼の音が響き、突如複数の矢が飛来して、目の前の黄巾党に刺さっていく。

その方向を見ると薄い青色の髪の前髪だけが右目を隠しており、前髪以外の髪を後ろに固めている女が弓を持っていた。

「はあああああ！」

そして桃色の髪を二つに分けている少女の鉄球が黄巾党に襲いかかった。

旗印は夏候に許。救援が来たようだ。

俺はそれを見ると黄巾党に向かって行った。

黄巾党たちを撤退させることに成功した俺たちは救援にきた女と少女の二人と街の中で集合する。

「私は陳留州牧の曹操様の部下、夏候淵だ」

「僕は許緒、街を守ってくれてありがとう」

凪たちも自己紹介をしていく。

夏候淵は凪と面識があったらしい。

「それでお前は？」

最後に俺が自己紹介する時になった。

「俺は名を祇柳、字は罫空です……傭兵で旅をしていたのですがここに寄った時に凪たちに街を守るよう依頼されました」

「そうか……」

「ええっ……そうです」

「あれ？　琥音はん……性格違ってへん？」

俺は真桜を見る。真桜は軽く怯えた。

「すみませんが……素を出しても良いですか？」

「ああっ……楽にしてくれて構わない」

「僕も気にしないよ」

夏候淵と許緒は言う。

「それじゃあ失礼して……とりあえず撤退させた黄巾党だが、まだ襲って来るだろう……夏候淵さんの主の曹操さんの本隊が来るまでどれぐらいかかる？」

「姉者や曹操様ならおそらく急いで向かって来るだろう……ある程度凌ぐ必要がありそうだが……」

「だよな……正念場になるか……矢の補充をしてもらって良いか？」

「分かった……お前も弓に覚えがあるようだしな」

「まあ、ぼちぼちだ……」

「そうか……その腕しっかりと見させてもらうとしよう」

夏候淵の弓術は弓で戦う事に主軸を置いたものだ。

複数の矢を番えて動きながら放ち、遠くから狙撃したりしていた。

祭さんは剣も扱えるから、弓は遠距離の相手に対してのみ使っていた。

俺は夏候淵の戦闘技術をしっかりと覚えている。

まだ身につけてはいないが……。

又、許緒の戦闘技術も覚えたが……馬鹿力を持っていないので鉄球は扱えないだろう。

身につけたら、応用に活かすか。

「報告！　黄巾党が現れました！」

兵士の一人が報告に来た。

「良し、行くぞ季衣！」

「はい、秋蘭様！」

夏候淵は言う。

「俺たちも行くぞ！」

「はい！」

凪が返事を返し、真桜と沙和は頷く。

そして、俺たちは黄巾党から街を防衛するため戦う。

俺と夏候淵は柵を壊そうとした黄巾党に矢を放つ。

矢は黄巾党に刺さり、黄巾党の命を奪う。

「良い腕だな……」

「夏候淵さんに比べりゃまだまださ」

「そんなことは無いと思うが？」

「そうか？　まあ、お褒めの言葉受け取っとくぜ」

俺はさらに矢を放つ。

黄巾党は先ほどの襲撃よりも勢いを増して、街の中へ向かって来る。

これじゃあきりが無い。

防柵もいくつかは壊された。

凪たちに許緒は中に入ってきた黄巾党を倒している。

「秋蘭様っ！　西側の大通り、二つ目の防柵まで破られました！」
許緒が言う。
「……ふむ、防柵はあと三つか。どれくらい保ちそうだ？　李典」
「せやなぁ、応急で作ったもんやし、あと一刻半保つかどうかって所やないかな？」
「……微妙なところだな。姉者達が間に合えば良いのだが……」
「なんとか持ちこたえるしか無いな」
「しかし、琥音様や夏候淵様が居なければ我々だけではここまで耐えることは出来ませんでした。
ありがとうございます」
凪が言う。
「それは我々も同じ事。貴公ら義勇軍がいなければ、連中の数に押されて敗走していたところだ」
「俺は雇われたからな……最善は尽くすさ」
「いえ、それも琥音様や夏候淵様の指揮ががあってのこと。いざとなれば、後のことはお任せします。
自分が討って出て……」
「凪、それは許さない！」
俺は凪を止める。

「琥音様？……」

「お前は俺の雇い主だろう……俺は雇い主やそれに関連する人を守ることを信条にしていてな……それに死んだらそこで終わりだ。犬死は駄目だ。それにお前が死ねば真桜や沙和が悲しむぜ？」

もう虎蓮さんを失った時のようなやるせない気持ちを味わうのはごめんだ……。

「そうだよ……今日はぜったい春蘭さま達が助けに来てくれるんだから、
最後まで頑張って守りきらないと！」

「……せやせや。突っ込んで犬死にしても、誰も褒めてくれへんよ
うちらも凪には死んでほしくないしな」

「……」

凪は沈黙している。

「今日百人の民を助けるために死んじゃったら、その先助けられる何万の民を見捨てることになるんだよ。わかった？」

俺が何か言う前に許緒が言った。

「……肝に銘じておきます」

「……ふふっ」

夏候淵が笑う。

「あ、何がおかしいんですか、秋蘭さまー！」

「いや、昨日あれだけ姉者に叱られていたお前が、一人前に諭しているのが……おかしくてな」

「うう、ひどーい」

夏候淵は許緒をまるで妹を見るような目で見ていた。

「夏候淵さまー！東側の防壁が破られたのー。向こうの防壁は、あと二つしかないの！」

沙和が不安そうに言う。

「……あかん。東側の最後の防壁は材料が足りひんかったからかなり脆いで。すぐ破られてまう！」

「とりあえず俺が先に行って凌いでおく！　後は頼むぜ夏候淵さん」

俺は東側の門に行き、矢を放って黄巾党を足止めする。

そして足止めしていると、銅鑼の音が響く。

旗印も見えた。曹に夏侯だ。

ふっ……ようやく到着か……。

俺は弓と矢を背中に背負って、剣を抜き黄巾党たちに向かって行った。

俺は剣を振るって、黄巾党を斬って辺りを死体で満たしていく。

遠目に黒髪な長髪で、大きく跳ねた前髪で後の髪を後ろで固めている女が剣を振るっているのが見えた。

そして、正規軍である曹操の到着により黄巾党は壊滅した。

俺は先に会わないように、又、休憩のために街の中に戻った。

「春蘭！季衣！無事かっ！」

先ほど剣を振っていた女が言う。

「危ないところだったがな……まあ、見ての通りだ」

「春蘭さまー！助かりましたっ！」

「二人とも無事で何よりだわ。損害は・・・大きかったようね」

金髪を二つに分け、巻いている女が現れた。

黒髪の女が夏候惇で、金髪の女が曹操なのだろう。

曹操からは覇気を感じた。

「はっ、しかし彼女たちと彼のおかげで、防壁こそ破られましたが、最小限の被害で済みました。街の住人も皆無事です」

「……彼女たちは？」

曹操たちは俺たちを見る。

俺は凪を促した。

「……我らは大梁義勇軍。黄巾党の暴乱に抵抗するため、こうして兵を挙げたのですが……」

『あー』

凪が言うと、何人かが叫ぶ。

真桜は曹操と、沙和は夏候惇と面識があったらしい。

「……で、その義勇軍が？」

「はい。黄巾の賊がまさかあれだけの規模になるとは思いもせず、こうして琥音様と夏候淵様に助けていただいている次第……」

「そう。己の実力を見誤ったことはともかくとして……街を守りたいというその心がけは大したものね」

「面目次第もございません」

「とはいえ、あなた達がいなければ、私は大切な将を失うところだったわ。秋蘭と季衣を助けてくれてありがとう」

「はっ」

「で？　あなたは？」

曹操は俺を見る。

「俺は祇柳……義勇軍で雇われた傭兵です……休むために立ち寄っ

たのですが依頼されましてね」

「そう、あなたにも礼を言うわ。ありがとう」

「いえいえ、そうだ……宜しければ俺を雇ってくれませんか？　腕には自信があります。損はさせませんよ？」

「へぇ、随分と自分を高く売るのね」

曹操は面白そうに俺を見る。

「華琳様……この祇柳と言う男、弓の腕は私と同等と言って良いぐらいで、剣の腕も優れておりました」

「琥音様は夏候淵様が来るまで指揮をしてくれました……」

「本当的確な指揮やったわ……動きやすかったしな……」

「琥音さん、本当に強かったの……」

「確かに祇柳の兄ちゃんは凄かったな……弓も剣も強いなんて凄いよ」

「秋蘭や季衣がそこまで言うなんて……それじゃあ雇おうかしら」

「華琳様！こんな男雇っては駄目です！」

背の小さい猫の耳の形をした布を被っている女が言う。

「そうです！　私はこの男が信用できません！」

夏候惇もそう言った。

「ふむ、納得いかない人がいるようだ……腕のほどを見せましょう」

「良いじゃない、ぜひ見せてもらうわ」

「貴様、良く言った！　私が相手してやろう」

夏候惇が剣を抜いた。

「春蘭！そんな男肉片も残さずぶった斬っちゃいなさい！」

猫の耳の形をした布を被っている女が言う。

「おう、任せろ！」

夏候惇もそれに答えた。

「中々、物騒な事言いますねぇ……俺もうゾッとしますよ」

言いながらも剣を抜いた。

俺と夏候惇が構えると、曹操たちは俺たちから離れる。

「行くぞ！」

「ええっ、来てください！」

夏候惇は力重視だ。戦いぶりを見て分かった。

まあ、鈴々よりは隙が無いが……。

夏候惇は俺に詰め寄ると剣を振り下ろす。

俺は先読みすると剣を振り上げて、ギリギリ無力化出来るところで弾く。

腕が痺れた。

「ほう、我が剣を弾くとはやるではないか……秋蘭や季衣の話も嘘ではないようだ」

「いえいえ、結構ギリギリなんですよ？」

「そうだろう、そうだろう……まだまだいくぞ！」

夏候惇は剣を振り、振り下ろし、振り上げる。又振る。

猛攻を繰り出してきた。

俺はそれをギリギリで弾いていく。

そして、後退していく。

「どうした、どうした！　そんな程度か！」

「くっ！　何と言う力だ！」

俺は言いながらも弾いていく。

そして、徐々にではあるが先読みしながギリギリから完全に無力化

できるところで弾いていく。

「む？　貴様……本気を出してきたのか？」

「守りには自信がありましてね」

「はっ、その守り砕いてくれる！」

夏候惇は大きく踏み込み、最高の一撃を繰り出すために剣を振り上げる。

俺はそれを先読みすると、剣を左の逆手に持つ。

そして、右に静かに移動する。

「はあああ！」

夏候惇は振り下ろす。

俺はそれに合わせるように前へと踏み出して、夏候惇の顎に右手の掌底を叩き込むため振る。

「っ！？」

夏候惇は後ろに跳躍して避ける。

掌底は掠った。

だが、十分だ。

「中々素早いではないか……」

「そうですかね？……次はこちらからいきますよ？」

「ふっ、来い！」

俺は左の逆手で持った剣を前にして、右手を後ろに退き、右足も後ろに退いた構えをする。

「それがお前の構えか！」

「そうです」

俺は右足に氣を集中させ溜めながら夏候惇に向かって行く。

「隙ありだ！」

夏候惇は足を踏み出すが、ぐらつく。

「くっ！？」

さっき掠った一撃は見事脳を揺らしたようだ。

俺は夏候惇が体勢を戻す前に左の逆手の剣で首を狙って振る。

「っ！」

夏候惇は僅かに首を後ろに反らして避ける。

俺は振った勢いそのままに回転して、右足の溜めた気を解放して纏

う。

凪は溜めた氣を解放して放つが、俺は氣弾を放たずに留めることで纏う事が出来るよう訓練した。

右足は光り輝く。

そして回転を加え、氣を纏った右足の蹴りを夏候惇の腹に繰り出す。

「はあっ！」

「がっ！」

蹴りが炸裂した瞬間に纏った氣を放つ。

瞬間爆発が起こった。

「ぐあああああ！」

夏候惇はかなりの距離を吹っ飛び、やがて地面に背中を叩きつけた。

これが俺の氣弾の使い方だ。足や手に纏って叩きつけて放つ。

こうすれば避けようが無い。

周りを見ると、皆呆然としている。

俺は曹操に近づいた。

「どうですか？　俺の腕のほどは……さっきのは試合なので加減しましたが……」

あれぐらいなら夏候惇も頑丈そうだし、大丈夫だろう。

すぐには起き上がれないだろうが……。

「ええっ……あなたを雇うわ……」

「それは良かった……」

こうして俺は雇われる事になった。

傭兵は覇王とその部下と交流する。

「大丈夫か姉者？」

夏候淵は夏候惇の元に駆け寄る。

「ああっ、大丈夫だ秋蘭……」

夏候惇は起き上がって、立ち上がった。

「貴様……いったい何をしたのだ？……身体が一瞬ぐらついたのだが……」

夏候惇は俺に問いかける。

「なに、簡単なことですよ……顎を掌底で打っただけです……」

俺は右の掌底で自分の顎を軽く叩く。

「だが、私は避けた筈だ……」

「それでも掠ったでしょう？　顎は脳と繋がってますから……衝撃を与えるとそのまま脳に伝わるんです。それが軽い衝撃でもね……そして俺は夏候惇さんの顎を掌底で打って脳を揺らした。これがあなたがぐらついた理由です」

「良く分からんがつまりお前の作戦か……」

「まあ、そう言うことですね……」

「……最後のあの蹴りは？……」
「あれは氣弾を応用しただけです……」
「そうか……貴様の実力は分かった。次は負けんからな」
「俺も負ける気はありませんよ？」
「ふっ、望むところだ……」
俺と夏候惇は握手をする。
「祇柳の兄ちゃん、春蘭様に勝つなんて凄い……」
許緒が言う。
「琥音様……お見事でした」
「琥音はん……凄すぎやろ……」
「とっても凄かったの～」
凪、真桜、沙和が俺に近づきながら言う。
「まさか姉者を倒す程とはな……驚かされたぞ祇柳」
夏候淵が俺に近づいて言う。
「こっちは結構必死だったんですよ？」
「その割には余裕に見えるが？」

「さあ、どうでしょうかね……」
「ふっ、随分と頼もしい奴だ」
夏候淵は微笑していた。

「もう、何でそんな男なんかにやられちゃうのよ！春蘭！」
猫の耳の形をした布を頭に被った女が言う。
「今回はこいつの方が一枚上手だった……次は私が勝つがな！」
夏候惇はそう言った。
「ところで、あなたたち義勇軍の事だけど……秋蘭、彼女たちはあなたから見てどうだった？」
「はっ！　鍛えればひとかどの将になれるかと……」
「そう……あなたたちの名は？」
曹操は凪たちを見て言う。
「楽進と申します。真名は凪……曹操さまにこの命、お預けいたします」
「李典や。真名の真桜で呼んでくれてもええで。以後よろしゅう」
「干禁なのー。真名は沙和っていうの。よろしくおねがいしますなのー」
凪たちは真名を預けた。

「凪、真桜、沙和ね。……祇柳、あなた……傭兵を止めて私に仕えなさい」

「それは無理ですね……俺には忠誠心というものがありません……誰にも仕える気は無いし、気楽で自由にできる傭兵が合ってるんですよ」

「あなたは春蘭を倒すほどの腕を持ち、弓の腕も秋蘭と同等だと言う……傭兵にしとくにはもったいないわ」

「そう言われましてもね……」

「……まぁ、いいわ……かならずあなたを手に入れてあげるから……そうねぇ、祇柳は人を鍛えることは出来るのかしら？」

凪たちの訓練か……ふむ、すこしばかり俺の覚えた技術など教えてみるのも良いかもしれない。やってみるか。

「人を鍛えた事はありませんが、報酬を頂ければ、引き受けますよ……傭兵としてね」

「それじゃあ決まりね……」

「ええっ、俺の真名は琥音です。あなたたちに預けます」

「私は華琳よ……真名を呼ぶことを許すわ」

俺と華琳は握手をする。

「ところで素の口調に戻して構いませんか？」

「え？　ええっ……構わないわ」

「それじゃあ、失礼して……これからよろしくな。華林」

「随分変わるのね……」

「まあ、一応の礼儀って奴だ。雇い主を不満にさせたら駄目だしな」

「そう、ひとまず義勇軍の三人をあなたに預けるわ。あなたたちもそれで良いわよね？」

曹操は凪たちに聞く。

「はっ、私は琥音様なら文句はありません……どうかご指導の程宜しくお願いします」

「うちも文句ないで、鍛錬の方はお手柔らかに頼むで、琥音はん」

「沙和も文句ないの～、鍛錬はほどほどにしてほしいの～」

「ああっ、よろしくな……まあ、心配するな。俺は厳しくはしない主義だからな」

「華琳様、どうしてこんな奴に真名を預け、おまけに貴重な部下を預けるのですか！」

今まで何も言わなかった猫の耳の形をした布を被った女が叫ぶ。

「あら、桂花は琥音が不満かしら？」

「はい、そもそも男と言うだけでも不快なのに……」

どうやら猫の耳の形をした布を被った女は男嫌いらしい。

あまり関わらないでおくか。

触らぬ神になんとやらってな……。

「でも、琥音は傭兵よ。報酬さえ払えばどんなことでもしてくれるわ……そうよね？」

華琳は俺に問いかける。

「ああっ、内容にもよるが基本は報酬さえくれれば問題ない。裏切ったりしないから安心してくれ。傭兵は信用が第一だからな」

「私は琥良の実力を見て、そして話を聞いて信頼できると思ったからこそ預けようと決めたわ。向こうも信頼してくれたようだし、私もその信頼に答えた。私の判断に不満があるのかしら？」

「そ……それは……」

華琳に言われ、猫の耳の形をした布を被った女は言葉を無くす。

「それじゃあ、春蘭たちも真名を預けなさい」

華琳がそう言うと、夏候惇たちが近づいて来る。

「はっ、琥音……華林様の信頼を裏切ったら私が叩き斬ってやるからな。私の真名は春蘭だ」

「心配するな……俺は雇い主は裏切らねえよ。宜しくな春蘭」
「おう！」
俺と春蘭は二度目の握手をする。
「私の真名は秋蘭だ。宜しく頼むぞ琥音」
「ああっ、宜しくな秋蘭」
俺と秋蘭は握手をした。
「僕の真名は季衣。琥音の兄ちゃん……お兄ちゃんって呼んでも良い？」
「好きに呼んでくれて構わないぜ……気にしないからな。これから宜しくな季衣」
「えへへっ……」
俺は季衣の頭を撫でてやる。季衣は嬉しそうに撫でられていた。
「……」
猫の耳の形をした布を被った女は沈黙している。
「桂花？……」
華琳は促すように言う。
「わ……私の……」
屈辱を噛み締めるかのように言葉を紡ぐ。
「別に嫌なら言わなくても良いぜ？……男嫌いなんだろ？……無理

してまで預けられても困るし、俺からはお前に対して交流しないつもりだからな」
さっきまで言葉を続けていた女は俺の言葉に安堵して、沈黙するが……。

「琥音は余計な事は言わないで。桂花……私の愛するあなたなら春蘭たちが真名を預けたのにあなたが真名を預けないなんてことはしないわよね？　私は自分勝手な女を愛した覚えは無いわ」
華琳の言葉に猫の耳の形をした女は顔を青くする。

「私の真名は桂花よ！」
そして、鬼気迫るような顔で真名を言う。

「お前の名前と字は？」

「な……何よ？」

「男が嫌いなんだろ？　嫌いな奴に真名なんか呼ばれたくない筈だ。一応預かっておくが名前か字で呼ぶ。だから教えてくれ」

「私の名は荀？。字は文若よ」

「そうか……今は華琳のために力を貸すつもりだ。信頼にも応える。その気持ちだけは分かってほしい……俺からはお前に対して一切の干渉をしないから安心してくれ」

「……」
荀？は戸惑うかのような表情をしていた。

「……まあ、いいわ……これで全員自己紹介を終えたわね……」

そして、俺と凪たちは華琳たちによる黄巾党の討伐に加わることになった。

傭兵　有能さを示す

俺たちはこれからのため軍議をしていた。

「さて、これからどうするかだけれど……新しく参入した琥音たちもいることだし、一度状況をまとめましょう。……春蘭」

華琳は春蘭に説明するよう促す。

「はっ、我々の敵は黄巾党と呼ばれる暴徒の集団だ。細かい事は……秋蘭、任せた」

「人任せかよ！」

普通は細かいことを説明するものだと思うんだが……。

「やれやれ……黄巾党の構成員は若者が中心で、散発的に暴力活動を行っているが……特に主張らしい主張はなく、現状で連中の目的は不明だ。また首領の張角も、旅芸人の女らしいという点以外は分かっていない」

秋蘭は正確に現状を説明してくれた。

「不明な点が多いか……厄介だな」

「ええっ、中々困らせてくれるわ」

俺の呟きに華琳は答えた。

「目的とは違うかもしれませんが……我々の村では、地元の盗賊団と合流して暴れていました。陳留のあたりでは違うのですか？」

凪が質問をする。

「同じようなものよ。凪たちの村の例もあるように、事態はより悪い段階に移りつつある」

「悪い段階？……どういう意味ですか？」

春蘭も質問をした。

「ここの大部隊を見たでしょう？　ただバカ騒ぎをしているだけの烏合の衆から、盗賊団やそれなりの指導者と結びついて組織としてまとまりつつあるのよ」

その問いに荀？が答えた。

「……ふむ？」

春蘭は良く分かっていない。

「要するに……今までのように、春蘭が大声で咆えたくらいじゃ逃げ出さなくなるって事」

「ああ、なるほど」

「……本当に分かってるのかしら？」

「秋蘭や季衣だけでは苦戦するという事だろう。それくらいは分かるぞ。バカにするな！」

……それは分かっていると言って良いのだろうか？　春蘭は知能が低いんだな……将軍なのに大丈夫か？　まあ、鈴々と同じような感じか……。

「ともかく、一筋縄では行かなくなったと言う事よ。ここでこちらにも味方が増えたのは幸いだったけれど……これからの案、誰かあ

る？」

華琳は皆に意見を聞く。ふむ、人を増やして大部隊になる黄布党か……それなら……。

「俺から提案があるが……良いか？」

「ええっ、良いわよ」

華琳は面白そうなものを見る目で俺を見る。

「人が増えて、大部隊になればなるほど戦場において重要である糧食の消費も当然増える。となると……何処かに連中の物資の集積地点があるはずだ。そこを叩くってのはどうだ？」

「なるほど……」

「その手があったわね……」

秋蘭と荀？は理解したようだ。

「にゃ？」

「どういう事だ？」

季衣や春蘭には難しいか。

「……良い所に気づいたわね」

「まあ、戦場で稼いでいるからな……」

「ますます、あなたが欲しくなってきたわ」

「そうか……」

まあ、俺の意見が雇い主のためになるなら何よりだが……。

「琥音様……流石です」

「琥音はんって本当有能やなぁ……」

凪は憧れの視線を俺に向け、真桜は感嘆していた。

「それじゃあ、すぐに各方面に偵察部隊を出し、情報を集めなさい。桂花は周辺の地図から物資を集積できそうな場所の候補を割り出しなさい。偵察の経路は何処も同じくらいの時間に戻ってこられるよう計算して。出来るわね？」

「お任せください」

華琳の言葉に嬉々として返事を返す。

「他の者は、桂花の偵察経路が定まり次第、出発なさい。それまでに準備を済ませておくように！」

「はい！」

「分かりました！」

春蘭と季衣が返事をするが、分かっていると信じよう。

「相手の動きは流動的だわ。仕留めるには、こちらも情報収集の早さが勝負よ。皆、可能な限り迅速に行動なさい！」

「はっ！」
凪が返事をした。

「すいませ～ん。軍議中失礼しますなの～」
沙和が軍議の場所に場所に入ってきた。
確か街の民に食料を配っていた筈だが……。
「どうしたの、沙和。また黄巾党が出たの？」
「ううん、そうじゃなくてですね～」
「何だ。早く言え」
春蘭が急かす。
「町の人に配ってた食糧が足りなくなっちゃったの。代わりに行軍用の糧食が配ってもいいですか～？」
「……桂花、糧食の余裕は？」
「数日分はありますが……義勇軍が入った分の影響もありますし、ここで使い切ってしまうと、長期に及ぶ行動が取れなくなりますね」
「……とはいえ、ここで出し渋れば騒ぎになりかねないか。いいわ、まず三日分で様子を見ましょう」
「三日分ですね。わかりましたなの～」
沙和はそれを聞くと駆け足で出て行った。

「桂花、糧食の補充を手配しておきなさい」

「承知しました」

「琥音……あなた偵察はどうかしら？」

「俺は傭兵だ……そういう任務も当然出来るさ」

「そう、期待しているわ」

「ああっ……」

そして、沙和を除いた武将たちが偵察へと出かけた。

俺は黄巾党の罠や伏兵を警戒しながら気配を消して山の中を静かに走って探していた。

偵察なら思春や明命の技術が役に立つ。

視界にぼんやりと砦のようなものが見えた。

俺は氣を目に集める事で、強化する。

はっきりと古ぼけた砦が見える。

廃棄された砦か……。

そして、黄巾党達が物資の移動の準備を始めている。

早くしないとまずいな……。

俺は報告するため戻った。場所もしっかりと覚えた。

「黄巾党はすでに物資を運ぶ準備をしていた。早急に手を打たないとまずいぜ」

「そうね……すぐに陣を撤収するわ。皆、急いで支度なさい」

俺が報告すると、すぐに華琳は指示をする。

「まだ、秋蘭が戻っていませんが……」

「待つ時間も惜しいわ。現地で合流するように遣いの者を出しなさい」

「予備の糧食も置いていくしかないわね。配る時間も惜しいけど……捨て置くと、今度は取り合っていさかいの種になるか……。沙和を残して配給を任せるべきかしら……」

「ああっ、沙和もしっかりと仕事をしていたようだし……向いてると思うぜ……任せた方が良いだろう」

「琥音が言うのなら……配給は沙和に任せて、総員、可能な限り急いで撤収、終わった隊から出発なさい！」

「はっ！」
桂花が返事をする。

「春蘭、撤収はいいから先頭で案内なさい。一番遅くなった隊は、夏候惇隊の陣の撤収をさせるわよ！」

「了解です！」
春蘭も返事をした。

こうして俺たちは沙和に配給を任せて、集積地点である山奥の古ぼけた砦へと撤収しながら向かって行った。

傭兵　競争に加わる

俺たちは半日はかかるであろう行程を凄まじい勢いで駆け抜け、数刻で黄巾党の物資の集積地点である山奥の古ぼけた砦に着いた。

「本当に良い場所を見つけたものだわ……」

華琳が呟く。

「敵の本隊は近くに現れた官軍の迎撃に向かっているようです。残る兵力は一万がせいぜいかと」

凪の言うとおり、俺たちから大分離れたところで争っているのが見えた。

「籠れば有利な砦を捨てる……良くも悪くも賊と言う事か。発見できていなかったらここももぬけの殻だったな」

「華琳さまのご威光に恐れをなしたからに決まっているわ。だから、わざわざ砦まで捨てようとしているのだろう」

俺の呟きに春蘭が反応する。

それは違うと思うぞ……春蘭。

「連中は捨ててあるものを使っていると言う事なんだろう。だから捨てることに何も感じない……琥音、良く見つけてくれた」

「ああっ、役に立てて何よりだ」

「本当、見つける事ができて良かったわ。秋蘭、こちらの兵は？」
「義勇軍と併せて八千と小々です。向こうはこちらに気づいていませんし、荷物の搬出で手一杯のようです。今が絶好の機会かと」
「ええ。ならば一気に攻め落としましょう」
秋蘭の報告に華琳は砦を攻めることを決める。
「華琳さま。ひとつご提案が」
荀？が進言する。
「何？」
「戦闘終了後、全ての隊は手持ちの軍旗を全て砦に立ててから帰らせてください」
なるほど……確かにそうすれば華琳の名は一気に広まるな。
「え？　どういうことですか？」
「この砦を落としたのが、我々だと示す為よ」
「なるほど。敵の本隊と戦っているという官軍も、本当の狙いはおそらくここ……。ならば、敵を一掃したこの砦に曹旗が翻っていれば……」
季衣は理解できなかったが、秋蘭は理解できたようだ。
春蘭が鈴々なら、秋蘭は愛紗と言ったところか……。

「……面白いわね。その案、採用しましょう。軍旗を持って帰った隊は、厳罰よ」

「なら、誰が一番高いところに旗を立てられるか、競争やね！」

「こら、真桜。不謹慎だぞ」
華琳の言葉に真桜は提案して、凪が諌めたが。

「ふん。新入りどもに負けるものか。季衣、お前も負けるんじゃないぞ」

「はいっ！」
春蘭よ……大人気ないぞ。

「姉者……大人気ない」

「そうね。一番高いところに旗を立てられた隊は、何か褒美を考えておきましょう」
周りの状況を見て、華琳が言う。

「それなら俺も参加しよう。良いよな？」

「ええっ、勿論よ」
話が分かる雇い主だぜ。

「ただし、作戦の趣旨は違えないこと。狙うは敵の守備隊の殲滅と、敵の糧食を焼き尽くすことよ。いいわね」

「はっ！」
春蘭が真っ先に反応する。

まあ、賊の糧食を奪えば評判が下がるしな。

「これで軍議は解散とします。先鋒は春蘭に任せるわ。いいわね？　春蘭」

「はっ！　お任せください！」

「なら、この戦をもって、大陸の全てに曹孟徳の名を響き渡らせるわよ。我が覇道はここより始まる！　各員、奮励努力せよ！」

こうして軍議は終わった。

俺は凪と真桜に意見を出した後、義勇軍の配置を任せた。

俺は傭兵だ。元々義勇軍は凪たちが率いていたしな。

弓を構えて、矢を三本番え放つ。

全て的に突き刺さった。

「すこしずれてるか……」

俺は秋蘭の弓術を身につけるために凪たちの報告を待つ間、訓練をしていた。

祭さんの弓術を身につけたおかげで、当てることはできる。
弓術の根底は一緒だ。狙って射る。
動きや呼吸や射ち方などは違うが……まあ、祭さんほどの達人の弓術を身につけてるおかげでそんなに時間をかけることなく秋蘭の弓術を身につける事ができる。
「琥音様……何故弓を？」
「ん？　まあ、ちょっとした調整をな……配置は済んだのか？」
「はい、楽進隊は布陣完了です」
「そうか……沙和も連れてくるべきだったな……あいつなら喜んで参加するだろうしな」
「そうですね……沙和なら参加するでしょう」
「ところで凪は旗立て勝負の褒美は何が良いんだ？」
「私ですか？　私は別にないのですが……琥音様は何かあるんですか？」
「俺か？　そうだな、凪と一緒に過ごすために休みが欲しいかな」
「え？　私と……ですか……」
「凪は嫌か？」

「い、嫌ではありませんが……」
凪は顔を赤くしていた。
「なんてな……冗談だ」
俺は凪の頭を撫でる。
「……」
凪は少し残念そうにしていたが、頭を撫でられると再び顔を赤くして俯く。
俺は少し撫でた後、撫でるのを止めた。
「あっ……」
凪は小さく声を出す。
「なあっ……「何や何や。何面白い話しとるん？」」
俺が言う前に真桜が後ろから来た
「真桜か……配置は終わったのか？」
「勿論、終わったで」
「そうか……旗立て競争での褒美を聞いてたんだ……真桜は何が良いんだ？」
「そんなん秘密や……琥音はんは？」
からくり関連ではあるだろうな……。
「俺も秘密だ……この戦が終わったら宴会でもするか……代金は俺

が持とう。勿論、沙和も一緒にな」
「マジなん！？　琥音はん、太っ腹やわ」
「良いんですか？」
「ああっ、ただし沙和の分まで頑張るんならな」
「よっしゃー、やる気出たわ」
「ありがとうございます」
真桜は喜び、凪は頭を下げる。
「気にするな……」
たまにはこういう事に使うのも悪くない。
さて、報告に行くか。
華琳のところに報告に行った。

「華琳、楽進隊と李典隊布陣完了したぜ」
「華林さま！　秋蘭隊、布陣完了しました」

俺と季衣が報告する。

「そう、なら行くわよ」

「御意！　銅鑼を鳴らせ！　鬨の声を上げろ！　追い剥ぐ事しか知らない盗人と、威を借るだけの官軍に、我らの名を知らしめてやるのだ！　総員、奮闘せよ！　突撃ぃぃぃぃっ！」

春蘭の号令により、俺たちは進軍を開始した。

俺は矢を五本番えて放つ。

矢は黄巾党の額、首、胸に刺さる。

狙いからはずれているが……。

「もうちょっと調整がいるか……ふん！」

左から殺気を感じた。

俺は左から袈裟切りをしてきた黄巾党の剣の腹を弓で下から押すようにして弾き、右の拳に少量の氣を纏って甲を顔面に叩きつける。

炸裂した瞬間に氣を放つ。

爆発が起こり、黄巾党は吹っ飛び地面に背中を叩きつけた。

「こっちは十分だな」

俺は弓を背中に背負いながら剣を鞘から抜く。

そして、黄巾党に向かって行く。

黄巾党を叩き斬り、死角に回り込みながら斬り、動きを先読みしながら斬る。

黄巾党の斬撃は弾き、避け、防いで又斬る。

次々と黄巾党を殺していく。

周りを見ると凪や真桜も奮戦していた。

黄巾党は次々と仲間を失い、中には悲鳴を上げながら逃げ回る奴もいる。

俺は進みながら黄巾党達をただの亡骸に変えていく。

しばらく進むと砦の前に着いた。

上を見上げると、季衣が城壁を登っていた。

中々、身軽だ。

目的地は砦の頂点か。

俺は季衣の動きを覚えて、素早く壁を登り始める。

思春や明命の技術を身につけたおかげで、動きだけならどんなものでも再現できる。

明命の隠密訓練では素早い木登りのやり方も覚えた。

少しトラウマがあるが……。

俺が砦の頂点に着くと、季衣はまだ来ていなかった。

動きを覚えさせてもらったこともあり、待つことにする。

戦場を見渡すと、黄巾党は数を減らしていく。

春蘭や秋蘭も奮戦している。

そろそろ戦も終わるだろう……。

「あれ？　兄ちゃん？」

「よっ、季衣」

俺は右手を上げて、会釈する。

「兄ちゃんいつ来たの？」

「ついさっきだ……お前よく登れたな」

「へへっ、僕は昔から木登り得意なんだ。それにここが一番高いところだと思ったし」

城壁が登れるとは、一体どういう木登りをしてたんだ？

「そうか……」

「うん、でもお兄ちゃんも木登り得意だったんだね……」

「まあな……じゃあ、一緒に旗を立てるか」

「良いの？」

「別に構わないぜ……遠慮するな」

「うん、ありがとう兄ちゃん」

俺と季衣は二つの旗を立てる。

そして、一緒に降りると別々に分かれて戦場へと戻った。

「琥音様……今まで何処へ？」
何人か黄巾党を斬っていると凪と真桜と合流した。
「まあ、ちょっとな……おっ、糧食も焼かれているようだ」
周りを見ると、春蘭とその兵によって糧食が焼かれる。
「何か、勿体ないなぁ」
「気持ちは分かるがな……」
しばらく見ていると……。
「目的は果たしたぞ！　総員、旗を目立つところに挿して、即座に帰投せよ！　帰投、帰投ーっ！」
秋蘭の号令が響く。
「さあ、帰ろうぜ」
「はい！」
「はぁ、疲れたわ」
俺たちは黄巾党のいた砦から華琳の城へと帰って行った。
その帰り道。

華琳は俺たちを集め、簡単な会議らしきものを開いた。
帰ったら、片付けに専念して休めるようと言う事か……。
仲間の事を考えた良い気遣いだな。
「作戦は大成功でしたね、華琳さま！」
春蘭が言う。
「ええ。皆もご苦労様。特に琥音……素晴らしい働きだったわ……本当あなたが欲しくなるわね」
「俺はいつでも雇い主のために全力を尽くしているからな……報酬は弾んでくれよ？」
「ええっ、分かっているわ……凪や真桜も初めての参戦で、見事だったわ。沙和も的確な配給だったわね」
「ありがとうございます」
「おおきに」
「ありがとうなのー」
三人は礼をする。
「さしあたり、これでこの辺りの連中の活動を牽制することが出来たはずだけれど……」
「はい。しばらくは大きな動きは出来ないでしょう。ただ、もともと本拠地を持たない連中のこと。今回の攻撃も、時間稼ぎにしかな

らないはずです」

「でしょうね。だから連中の動きが鈍くなった今のうちに、連中の本隊の動きを掴む必要があるわ」

「情報を集めて回るか。　まあ、補給線が復活すれば重要度の高い所へ優先的に回されるしな……それを追って行けば重要地点も掴めるという事か」

随分と地道だな。仕方ないが……。

「そうね……しばらくは小規模な討伐と情報収集が続くでしょうけれど、ここでの働きで、黄巾党を私たちが倒せるかどうかが決まると言っても良いわ。皆、一層の努力奮闘を期待する！　以上！」

「ああ、そうだ。例の、旗を一番高いところに飾ると言う話だけれど……結局だれが一番だったの？」

「あーっ。　何か忘れとると思うたら、それか！」

華琳の言葉を聞いて、真桜が叫ぶ。だが、旗立て勝負を提案したのは真桜だったと思うんだが……。

言い出した奴が忘れるとは……。

「はっはっは。初めての戦で、そこまでの余裕はなかったか！　まだまだ青いなぁ！」

春蘭が笑いながら言う。

「くうぅ……！　置いて帰るので精一杯やったわ」

真桜はがっかりしている。

「春蘭は大人気なさすぎるけどな……」

俺はわざとらしくため息を吐いた。

「な、なんだとうっ！」

春蘭は怒っている。

誰が見ても大人気ないだろ。

「で、誰なの？」

「俺と季衣だと思うぜ……なぁ、季衣？」

「うん！」

「どこに挿したの？」

「砦の頂点だ」

「正殿の屋根の上に突き刺さっていた、あれか！？」

「ああっ」

「琥音様……何時の間に……」
「さすが傭兵なだけはあるなぁ、ちゃっかりしとるわ」
何やら凪と真桜が呟いている。
「……どうやって挿したの？」
「僕、木登り得意なんですよ」
「コツさえ掴めば誰でも出来るぜ？」
「ちょっと待て……季衣はまだ分かる。納得はできんが……琥音はどうやって登ったのだ？」
春蘭が俺に問いかけた。
「足で壁を蹴りながら登って、ある程度勢いをつけてから手で登ったが？」
『……』
皆は呆然としている。
「凄い、流石は琥音様だ」
「それができるのは琥音はんだけやない？」
まあ、俺のは組み合わせだからな。訓練を積めば誰でも出来ると思うんだが……。

「……ならその勝負は季衣と琥音の勝ちで良いわね。二人は何か欲しいものある？」

「うーん……特に、何も無いんですけど……」

季衣は困ったように言う。

「欲のない子ね。何でも良いのよ？」

「何かあるだろう。食べ物とか、服とか……」

「え？　どっちも、今のままで十分ですし……」

「領地まではさすがにあげられないけれど……何か無いの？」

「そんなものいりませんよー」

二人の意見にも季衣は何かを頼むと言うことはしなかった。

純粋だな。

「まあ、いいわ……季衣はひとつ貸しにしておくわね。何か欲しいものが出来たら、言いなさい」

「はいっ！　ありがとうございます！」

季衣には動きを覚えさせてもらったし、後で宴会にでも誘うか……。

「で？　琥音は何か欲しいものある？」

「そうだな……腕ききの鍛冶屋を紹介してくれ。いくつか使いたい武器があるんだ。勿論、金はそっちで払ってくれよ？」

「へえっ、あなた剣や弓以外にも何か使えるの？」

「まあな……」

「良いわ……最高の鍛冶屋を紹介して、武器にかかる費用も此方で払う。その代わり、後でそれを使った手合わせを見せてもらうわ」

「ああっ、良いぜ」

こうして俺は華琳の知る中で一流の鍛冶屋を紹介してもらい、槍と薙刀に蛇矛と鉄甲を頼んだ。

槍と薙刀と蛇矛は本来の物より少し短い。後で真桜に頼んで、半分に分けて接合するという武器にした。

からくりなら真桜だしな。

そして、穂先を槍、薙刀、矛に変える事が出来るようにした。

とりあえず槍の穂先を着けて半分にしている。

薙刀と矛の二本の穂先でも短めの武器として使える。

収納するものも真桜に作ってもらった。

腰に巻けて、後ろに二本の棒を収納する場所がある。また、右横に薙刀と蛇矛を収納する場所もある。

左横は俺がいつも使っている剣の鞘を収納する場所だ。

鉄甲は腕から手までを覆う鎧のようなもので、軽く、強度自体は低いが……俺にはこいつを使う事で出来る技術があるので、強度を気にせず軽めにした。元々俺の守備なら強度自体は関係ないしな。

左腕に装着するもので、一つだけだ。

勿論、どれも一流なものだ。……本当良い褒美だぜ。

ただ、あの後に凪と真桜と沙和と季衣で宴会をしたが……季衣が想像以上に食べ物を食べたので、溜めていた金がごっそりと減ってしまった。

余裕はあるが……。

まあ、良いか……皆楽しんでいたし、喜んでいたしな。

「はあっ！」

凪が拳を放つ。

腹を狙ったその一撃を俺は左の掌で弾いて、右拳の甲を凪の右顔面に打つ。

「くっ！」

凪はそれをくらって、動きが止まる。

俺は左足で凪の腹を蹴った。

「うっ！」

凪は蹴られて後退する。

俺は凪に向かって行く。

右の拳を放つ。

凪は防ごうとしたが……。

俺は途中で拳を止めて、右足で凪の左太腿を蹴る。

「っ！」

凪は痛みによって顔を顰める。

俺は凪の腹に縦にした左拳を打ち込み、引き戻すと縦にした右拳を顎に向かって振り上げる。

凪は顔を後ろに反らして避ける。

俺は右膝を上げて凪の腹に打ち込んだ。

凪はくらって、わずかに後退する。俺は左の掌底と右の掌底を水月に交互に打ち込んだ。

「うあっ！」

凪は大きく後退する。

「はあああっ！」

凪は俺に向かって踏み込み、腰を捻りながら右足を振り上げて俺の左顔面を狙った蹴りを繰り出す。

俺は屈みながら地を滑るような右足の蹴りを凪の左足に放つ。

「うわぁっ」

凪は体勢を崩して、地面に背中を打ちつけて倒れる。

俺は凪の顔面に右拳を突きつけた。

「これで終わりだ」

「参りました……」

俺は凪から離れる。

凪も起き上がった。

「凪、お前の攻撃は素直すぎて読まれやすい。もっと虚実を混ぜないとな」

「はい！　琥音様」

「後は、もっと最小な動きで相手に大きな打撃を与えれるようにならないとな……まあ、これは俺が教える。」

「ありがとうございます」

「ああっ、大丈夫だ。お前たちは十分才能がある……すぐ強くなれるさ」

俺は凪と真桜と沙和を訓練で鍛えていた。

とりあえず一人ずつ手合わせをして、欠点を教えながら良くなれる

ように指導する。

「うちら……三人続けて相手にしても、まったく疲れてへんなぁ……」

「沙和たちと同じ武器を使っていても強いの～」

俺は凪には体術、沙和には双剣、真桜には槍を使っていた。

双剣は俺の持つ剛剣と武器庫から持ってきた剣で戦い、真桜の槍は特殊なので、そのまま俺の持つ槍を使った。

「まあ、俺は最小の動きで戦っているからな……疲れはしない。お前たちも訓練を積めばできるようになる」

そして、俺は最小の動きを見せながら凪たちに模倣させて、又指導していく。

「ああっ、疲れたわ」

「なの～」

「良い勉強になります。琥音様」

「良し、休憩するか……次は基礎を徹底的に鍛えるからな……良く休んでおけ」

そして、三人に休憩させて俺は自分の訓練（朝早くにもやっている）をしようとしたのだが……。

「おおっ、ここに居たか！」

「ん？　何か用か春蘭？」

「おう、手合わせをしろ！」

あれ以来、何度か春蘭とは手合わせをしている。

いつも勝っているが……。

「今度こそ私が勝つ！」

「俺も負けるわけにはいかないな」

俺と春蘭は剣を構える。

槍や薙刀や矛も使って手合わせをしたこともあるが、一番手に馴染むのはやはり剣だ。

まあ、槍なども十分使いこなせるが……。

俺は春蘭に向かっていく。

俺は左の袈裟切りに剣を振る。

春蘭はそれを剣で防ぐ。

鍔迫り合いの状態になった。

「ちっ、やっぱ防がれるか……」

「あれでやられる私ではないわ！」

「そうだろうな……」

少しの間、押し合っていたが……俺は力を抜く。　春蘭は突然力を抜かれたことにより体勢を崩した。

俺は春蘭の腹を蹴る。

春蘭はその前に後ろに跳躍して蹴りの威力を軽減した。

「はあああ！」

春蘭は俺に向かって来た。

そして、剣を振り下ろす。

俺はそれを先読みして、静かに春蘭の後ろに回り込んだ。

「ぬ！」

俺は首に剣を突きつけようとしたが、春蘭はすぐさま右に跳んで避けた。

俺は春蘭を追う。

そして、体勢が崩れているうちに。春蘭に詰め寄り右に剣を振る。

「甘い！」

うまく力が乗っていない状態でありながら春蘭はそれを防ぐ。

俺はそのまま、右に左に剣を振り、右の袈裟切りに左の袈裟切り、剣を振り上げ、振り下ろす。

春蘭は剣で防ぎ続ける。

俺は猛攻をしかける。

俺は反撃されないように動きを変えていく。

「くっ！　動きをいちいち変えおって……」

春蘭は後退しながら何とか防いでいく。

「はああっ！」

春蘭は押されながらも反撃するために剣を振る。

俺はそれを先読みして、左の鉄甲で剣の軌道を止めた。

「な！？」

俺は首に剣を突き付けた。

「くっ、私の負けだ……」

俺は剣を引いて、鞘に納めた。

「琥音様、お見事でした」
「剣に槍に薙刀に矛に弓に体術……全部強いなんて凄いわぁ」
「琥音さん強すぎるの～」
「俺なんか大したことはないさ……」
「姉者に勝てる事は大したものだと思うが？」
秋蘭が後ろから声をかけてきた。
「そうだ、お前のような奴は今まで戦った中で初めてだ。いつも私の剣を防ぎ、お前の力は大したことないのに速さも重さも変わっていく。やりにくいぞ」
「まあ、そうしないと勝てないからな……力じゃお前には負けちまう」
「そうか、だがいずれお前に勝つからな」
「俺も簡単に負けないぜ」
「ふっ、望むところだ」
俺と春蘭は笑う。
「ところで、秋蘭はどうしてここにいるんだ？」
俺は秋蘭に問いかける。

「華琳様が琥音を呼んでいてな、ここにいると聞いて呼びに来たんだ」

「華琳が？　分かった、すぐに行こう」

「ああっ、頼む」

俺は凪たちに自由に訓練をするように言って、華琳の元へ向かった。

「何か用か、華琳？」

俺は玉座に来た。

「ええっ、あなたに聞きたいことがあるの……」

言いながら紙を取り出す。

俺はそれを見る。

「これは……ここの街の様子か……」

「そうよ……ここの街をもっと良くするためにはどうすればいいと思う？」

「おいおい、良いのか？　俺にこんな物見せて？」

「良いわ、あなたの考えを聞かせてちょうだい」

俺は紙をもう一度見る。

中々良い政治をしているようだが、警備は不足しているようだ。

「警備の状況が気になるな……あくまで俺の考えだが……」

俺は警備について良くなるように意見を出す。

穏や冥林に仕込まれたおかげである程度の内政もできる。

まあ、苦手だからあまりしないのだが……。

「そう、良い考えね……それじゃあ警備部隊についてはあなたに任せようかしら？」

華琳は俺の考えを聞くと、そう言った。

「別に良いが……俺はいずれ旅に出るぞ？」

「だったら、その前に使い倒してあげるわ」

「それはそれは……まあ、雇い主のために全力は尽くすぜ」

「そうしてちょうだい」

俺は玉座から出る。

俺は警備部隊の隊長となり、部下として凪と真桜と沙和も警備部隊に入る事になった。

傭兵は　江東の麒麟児と再会する

俺は腰の後ろから棒を二本抜いて、二つを接続して、薙刀にする。

俺は薙刀を振り下ろすと黄巾党を両断する。

更に振るい、黄巾党の体を切断していく。

鮮血が舞い続ける。

黄巾党の動きを先読みしながら、斬り、避け、弾き、防ぎ、又斬る。

更に死角に回り込んで斬る。

側には凪もいる。

俺と春蘭に季衣と凪は黄巾党と戦っている官軍の救援に来ていた。

状況は黄巾党に官軍が押されている。

もう、撤退しかないだろう。

俺は黄巾党を斬りながら進んでいると……官軍の将を見つけた。

出陣する前に多少は情報を得ている。

「あなたは華雄将軍ですか？」

俺は問いかける。

「おう、そうだ……貴様らはどこの兵だ？」

「俺の名は祇柳。陳留の州牧、曹操の代理で馳せ参じました。ご無事ですか？」

「ああ。本隊はすでに下がり、こちらも苦戦しておったが、貴公らのおかげで何とか命を繋ぐことが出来た。礼を言う」

「はい……黄巾党は俺たちが引き受けます。官軍の皆さまは急いで撤退してください」

「すまん。ならば、その言葉に甘えさせてもらう。張遼にも連絡せよ、撤退するぞ！」

「はっ」

「総員、撤退せよ！　撤退だ！」

華雄は撤退していた。

本隊が撤退しているのに、何故華雄はここに居たんだ？

殿を務めていたわけじゃないようだしな。

「祇柳様！」

兵士の一人がこちらに近寄って来た。

「どうした？　何かあったのか？」

俺は兵士に問いかける。

「はい。夏候惇将軍の部隊が突如退却した黄巾党を追いかけて行きました」

俺は兵士の報告に一瞬、耳を疑った。

「それは確かか？」

「はい！」

俺は問いかける。

あの春蘭（バカ）　それは思いっきり罠じゃないか……釣られてやがる。

仕方が無い。

「凪、俺は春蘭と季衣を連れ戻しに行って来る。ここは任せたぜ」

「はい！」

俺は春蘭たちが黄巾党を追いかけていった方向へと向かって行った。

とにかく急ぐ。

追いかけていくうちに森の中に入っていく。

ここはまさか……。

俺は更に急ぐ。

目の前に春蘭と季衣の姿が見えた。
「春蘭！」
俺は叫んだ。
「おう、琥音……どうしたのだ？」
「どうしたじゃねえよ。お前何やってんだ！」
「見て分からんか？　黄巾党を追っているんだ……何をそんなに怒っているんだ？」
「お前ら……ここが何処か分かってるか？」
俺は無駄だと知りつつ、二人に聞いてみた。
「何？」
「んにゃ？」
春蘭と季衣は首を傾げる。
やっぱり分からないか。
「ところで、黄巾党はどうした？」
「それが急に消えちゃったんだ」
季衣が答えた。

「そうか……やっぱりな」
「さっきから何を言ってるのだ。お前は……」
また春蘭が首を傾げる。
「ここはな……袁術の領土なんだよ！」
「何！？」
「にゃ！？」
ようやく事態が飲み込めたようだ。
「良いから、早く逃げるぞ！」
俺は言うが……。
耳でこちらに向かって来る音が聞こえた。
そちらを見ると、砂埃が見える。
「間に合わなかったか……」
とりあえず目を凝らして見る。
孫の旗と袁の旗が見えた。
あれは雪蓮か！
袁術の客将になったと聞いてはいたが。

良し……。

「良いか、今から俺がなんとかするからお前たちは何も話すなよ？」

「わ……分かった」

「そこの部隊！　所属と名を名乗……琥音？」

雪蓮の声が響く。

「よう、久しぶりだな雪蓮」

俺は右手で会釈する。

「琥音……随分変わったわね。一瞬見違えたわ」

「まあ、戦場を渡り歩いてきたからな」

「そう、ところでどうしてここに？」

「ああっ、それがな。今は陳留の州牧である曹操に仕えてるんだが……官軍の救援をしていたんだ。

だが、後ろにいる曹操の将軍である夏候惇と許緒が黄巾党の罠に引っ掛かってな。ここまで来てしまった」

「陳留とは随分北ね……軍を引き連れてるんだから侵略しにきたと取られても文句は言えないわよ？」

「そうだな……だが、こいつらは黄巾党を追っていただけだ。侵略の意思は無いぜ……」

「そうだ……そちらも賊がいては困るだろう。同行してもらってもいいから連中を追わせてくれんだろうか」
俺が言うと、春蘭はとんでもない事を言った。何も話すなと言ったのに……。

「それは都合よすぎるだろ……春蘭」
俺はため息を吐く。

「そうね……琥音の言うとおりよ」

「策殿。こちらの準備、整ったぞ」
祭さんが雪蓮の後ろから現れた。

「久しぶりだな、祭さん」
俺は右手で会釈する。

「琥音、逞しくなったの……」

「ああっ、ちゃんと鍛錬続けてるぜ」

「うむ、見れば分かるわい」

「……あら、思ったより早かったのね。つまんないの。もうちょっとゆっくりしていても良かったのに」

これは雪蓮に借りができそうだな。

「む？」

「夏候惇と言ったわね？　消えた敵部隊がどこにいるか、知りたく

ない？」

「良いのか？」

俺は雪蓮に問う。

「ええっ、この辺りは沼地が多いから、身を隠すにはぴったりなのよ。ヘタに追いかけると気づかれて、さらに逃げられちゃうからね」

「ということは……」

「私の領だったら許しはしない所だけれど、袁術の土地に誰が入ろうが知ったことではないわ。盗賊退治をしてくれるというなら、今日だけは目をつぶってあげる」

「何？　貴様が袁術じゃなかったのか？」

春蘭はまたとんでもないことを言う。

「馬鹿か！　袁術じゃなくて孫策だよ。雪蓮はな」

「冗談にしても笑えないわよ。私は袁術の客将の孫策、こっちは副官の黄蓋」

雪蓮は不機嫌になりながら言う。

「どうする夏候惇殿？」

「……答えるまでもなかろう。任務を果たしたら、すぐに帰らせてもらう。それで良いか？」

「なら、こちらで案内するわ。付いてきなさい」

「すまないな……雪蓮」
本当は撤退するつもりだったのだが……。

「良いのよ、別に」

「いや、そういうわけにもいかない。俺の雇い主は誇りを気にするんでな。借りを返したがるだろう。それでだ、俺がお前たちに雇われるというのはどうだ？　報酬は半額にしとくぜ」

「私は別に借りとかどうでもいいんだけど、琥音が来てくれるなら良いわ」

「決まりだな……まずは黄巾党を倒すか」

「ええ……」

「琥音、お前の鍛錬の成果見せてもらうぞ」

「ああ、良く見ていてくれ」

そして俺たちは雪蓮たちの案内で黄巾党の討伐に向かった。

傭兵は　覇王と別れる

俺は矢を五本番えて、黄巾党に向かって放つ。

矢は黄巾党の額、首、胸に突き刺さる。

黄巾党は次々に倒れる。

俺は矢を番えながら走る。

黄巾党たちの後ろに回り込んで、矢を放つ。

矢は黄巾党を死へと誘う。

俺は矢を背負うと、左の鉄甲で振り下ろされた剣を防ぐ。

右の縦拳を腹に打ち込む。

黄巾党は吹っ飛んで地面に倒れた。

俺は黄巾党に向かって、左の鉄甲をつけた拳を顔面に打ち込む。

黄巾党の顔面を潰して、吹っ飛ばした。

さらに走り、跳躍して回転しながら右の蹴りを繰り出した。　黄巾党の左顔面に炸裂する。

俺は右の掌底を振って、顎に打ち込んだ。

肘を後ろに引きながら打ち込む。黄巾党の顔面を潰した。
右足を蹴り上げて、黄巾党の顎を打ち上げる。
後ろに向かって、顎を打ち上げた足で蹴る。
腹部に炸裂した。
俺は左と右の拳と掌底を腹と水月に打ち込んでいく。
また黄巾党のいる場所に向かって行く。
跳躍しながら右膝を顔面に打ち込んだ。
そして黄巾党の反撃を鉄甲と手で防ぎ、弾いて拳から掌底に拳の甲、蹴りや膝を打ち込んでいく。
そして死角に回り込んで、また身体を武器に打ち込んでいった。

「良し、体術も弓術も馴染んできたな……」
俺は剣を抜く。
「本当に腕を上げたのぅ、体術も身につけたようじゃし」
「使えるものは何でも使うからな」
俺は雪蓮の元へ向かう。

黄巾党を頭から両断した。

「本当、久しぶりだよな」

「そうね……黙って行く事なかったじゃない……皆寂しがってたわよ。私も……」

「悪いとは思ってるさ……」

俺たちは会話しながらも剣を振って、黄巾党を上から横から両断したり、首を刎ねていく。

「随分強くなったようじゃない。こっちに来たら手合わせしましょう？」

「そうだな……」

黄巾党たちの鮮血が舞い、死体が転がっていく。

やがて、戦場は黄巾党の死体で埋まった。

「本当すまなかったな……」

「うむ、礼を言う。おかげで助かった」

「ありがとうございました」

俺たちは次々に礼を言う。

「良いのよ。賊を討伐してくれたしね……待っているからね琥音」

「ああっ……またな」

そして俺たちは華琳のいる城へと戻った。

「……と言うわけだ」

俺は華琳に報告する。

多少孫策の事も話したが……。

「……まあ、借りを返せるならそれで良いわ。あなたが抜けるのは想定外だけどね」

「元々、俺は雇われてるだけだからな。抜けても問題は無い……孫策とは知り合いだったのも助かった」

「あなたが孫堅と知り合いだったのも驚きだわ……春蘭は後でお仕置きね」

「華琳様！」
春蘭は顔を青くしている。
「だが、華林。黄巾党はまた力を増してきているな」
一時的に黄巾党の勢いは収まってきたものの、今日の軍議でまた盛り返してきているのが分かった。
「それは折り込み済みな事だから、驚くことではないけれど……以後、奴らの相手は気を引き締めるように。特に春蘭と季衣、いいわね！」
「はっ！」
「はい！」
二人は返事をする。
「黄巾党はこちらの予測以上の成長を続けているわ。官軍はあてにならないけれど……私たちの民を連中の好きにさせることは許さない。いいわね！」
「分かってます！　全部、守るんですよね！」
「そうよ。それにもうすぐ、私たちが今までに積み重ねてきた事が実を結ぶはずよ。それが奴らの最後になるでしょう。それまでは今まで以上の情報収集と連中への対策が必要になる。民たちの血も米も、一粒たりとて渡さないこと！　以上よ！」
そして軍議は解散となった。

翌日、俺は今までの働きによる報酬を貰い、陳留から南陽へと向かうために城外にいる。

見送りもしてくれるようだ。

「琥音、あなたのおかげで大分助かったわ……ありがとう」

「ああっ、こっちも良い雇い主に会えて良かったぜ」

俺は笑いながら言う。華琳は微笑していた。

「琥音、すまなかったな……」

「姉者が迷惑をかけた……」

春蘭と秋蘭が謝罪する。

「気にするな……春蘭は一生懸命だっただけだしな……忠誠心は凄いと思うぜ。まあ、もうちょっと考えることは必要だと思うがな」

「うむ……」

「本当にすまなかった……」

「ああ……」

俺は苦笑しながら言う。

「兄ちゃん、居なくなるのは寂しいよ」

「そうか……まあ、また会いに来るさ」

俺は季衣の頭を撫でる。

「うん、待ってるね」

「おう、待っててくれ」

また頭を撫でると、季衣から離れた。

「ふん、あんたなんて二度と来なければ良いのよ」

荀?が言う。

「ははっ、中々きついこと言うな……とりあえずはいなくなるから安心してくれ」

「……どうして怒らないのよ?」

「嫌いなものはどうやったって嫌いだろ?　暴言吐くのもしょうがないと思うしな」

「……」

「じゃあな、荀？」

「別れの時ぐらいは真名で呼んでも良いわよ……あなたの働きに対する報酬ってところね」

「そうか……それじゃあな桂花。俺からしたら又、華琳たちに会いにきたいけどな」

「……勝手にしなさい」

桂花は小さく呟いた。

「琥音様、行ってしまわれるんですね……」

「なんや、寂しくなるで……」

「寂しいの～」

「ははっ、短い間だったがお前たちと居るのは楽しかったよ。俺の初めての部下だったしな……これからも三人で力合わせて頑張ってくれ」

「はい……」

「分かったわ！」

「分かったの！」

三人は返事をするが、凪に元気が無かった。

「大丈夫だ。また会える……次に会ったときに強くなったお前を見せてくれ。それがお前の師としての願いだ。」

俺は凪の頭を撫でる。

凪は顔を少し赤くしながらこちらを見る。

「凪ならすぐに強くなれるさ。それじゃあな……」

「はい！　自分はもっと強くなります……その時に伝えたいことがあります。聞いてくれますか？」

「分かった。お前が強くなったらちゃんと聞くぜ……」

「お願いします」

俺は又、凪の頭を撫でると手を離す。

「琥音、次は必ずあなたを手に入れるわ」

「ふっ、無駄だと思うが頑張ってくれ」

「ええっ……言われなくてもね」

「それじゃあな、皆……一緒に居て楽しかったぜ。又会おうな」

俺はそう言って、歩き出すと陳留を後にした。

さあ、雪蓮に会いに行くか……。

傭兵は又、江東の虎に雇われる

今、俺は雪蓮の居る荊州南陽に向かっていた。

それにしてもまた、雪蓮たちとの所に行く事になるとはな……俺が傭兵として最初に仕えたのは雪蓮の母親で長沙の大守であった虎蓮さんだった。

未熟だった俺に対して虎蓮さんは手合わせを挑み、俺は負けた。その後、祭さんによって育てられた。

今思えば虎蓮さんは俺の記憶力や目と耳が優れていることを分かっていたのだろう。

だが、俺の初陣で虎蓮さんは荊州刺史の劉表の部下黄祖の罠によって戦死した。

まさか、いきなり雇い主を失うことになるとは思わなかった。

戦は誰でも死ぬ可能性が出てくる。敵の刃や矢、罠など敵に殺される。又、流れ矢などの不運によって死ぬこともある。

何が起こるかは分からない。それが戦だ。

分かってはいてもそれなりにショックは受けた。

あの人も又、俺の師だ。あの人がいたから今の俺がある。

俺は虎蓮さんが死んだ後に誓いを立てた。

雇い主やその仲間を必ず守るという誓いだ。

忠義心というものは今でも理解できないが、それに近いものは芽生えたのかもしれない。

俺は今までの事を軽く思い出しながら歩いていた。

「南陽はあそこだな……」

俺は目の前に見える門を見ながら呟いた。

雪蓮たちは虎蓮が死んだあと分裂する豪族などを抑えるため仕方なく袁術の客将となった。

その際、袁術により旧臣たちもバラバラな地方へと送られたらしい。

華林の所に仕えていたときに再会したが、袁術の客将と名乗っているときは不機嫌だったのが分かった。微妙な感情の変化だったが……よっぽど日頃嫌な目に会っているのだろう。

だが、虎蓮さんの娘である雪蓮はいずれ袁術から独立しようとしているに違いない。

いずれは袁術も滅ぶだろう。虎蓮さんの約束もあるしその時には俺も力を貸そう。

今はたまたま力を貸すことになったが……。

俺は南陽の門を抜けて城を目指す。

「おら、お前ら動くなよ！」

城を目指していた俺だが、遠目から黄巾党の男だろう数人が民を人質に取り、野次馬が集まっているのが遠目に見えた。

俺は気配を殺して、街の物陰に隠れて様子を見る。

男たちの数は五人。剣を首に当てるようにして人質に取られているのは老人の男と女だ。恐らく夫婦だろう。

そして男たちの目の前には……。

「人質を離しなさい。」

雪蓮が居た。

「離せと言われて、はい、そうですかーって聞けるかよ！」

黄巾党の男は答える。

「……しぇ、雪蓮ちゃん……」

「わ、儂はいい。婆さんだけでも……。」

どうやら雪蓮と親しいらしい。民と仲良くなるとは雪蓮らしいな。

老夫婦は男たちに囲まれている。

どうやったかは知らないが黄巾党たちはこの街に入った。しかし、警備兵か誰かに見つかり、捕まる前に何とかあの夫婦を人質にとったのだろう。だがそこに雪蓮が現れた。

雪蓮から滲み出ている覇気によって黄巾党は動けないでいる。　雪蓮も下手には動けないため好機を待っているようだ。

膠着状態になっている。しかしこの状況で人質を取るというのは得策ではない。

素直に人質を取る前に降参して命乞いをするか、何もせずに逃亡すれば良かったのだ。まだそのほうが何とかなっていた可能性はある。人質を取った以上殺すことはできないし、かといって離すこともできないだろう。

「ねえ、今人質を離してくれたら命は助けてあげるわ……どう？」

「……」

雪蓮の誘惑に男たちは迷っている。

もちろん雪蓮の言うことは嘘だ。民に危害を加えた以上許しはしないだろう。

あいつらはもう許される範囲を超えたのだ。後は死ぬしかない。

そして、黄巾党全員雪蓮の覇気に呑まれて後ろががら空きになっている。

俺がいる物陰からは黄巾党の背後から状況を確認しているために黄巾党は俺に対して無防備という事になる。

この場合、俺があいつらの隙を作ってもいいのだが……剣で人を殺すと行為によって、切断される肉体に飛び散る血や臓物は民たちにとってはかなり精神的な衝撃だろう。

できるならば見せるものでは無い。矢も衝撃的ではあるがまだ優しいものではあるはずだ。

俺は弓を背中から抜いて、矢を五本取り出す。

悪いがお前たちは此処で終わりだ。だが、運が良かったな……剣で斬られる痛みを味わうこと無く一瞬で冥土に逝けるんだからな……。

そして、五本の矢を番えると気配を消したまま物陰から飛び出して、黄巾党に向かって矢を全て放った。

「が……」

「な！……」

「ひ……」

「あ……」

「ぐ……」

黄巾党を一瞬で冥土に送った矢は全て寸分の狂いなく後頭部に刺さっていた。

男たちは倒れる。

俺は矢を背中に仕舞う。

雪蓮も人質になっている老夫婦も野次馬も皆、唖然としていた。

雪蓮を俺の姿を見ると、剣を鞘に納めた。

「琥音！」

そして走り近寄って来た。

「よう、また世話になりに来たぜ」

「いらっしゃい、さっきはありがとうね」

「気にする必要はない……俺からはあいつらが無防備だったからな。さっさと片付けただけだ」

「でも、助かったわ」

雪蓮は微笑む。

「あ……あの」

人質になっていた老夫婦が声をかけてきた。

「おじいちゃん、おばあちゃん……大丈夫？」

雪蓮は二人に微笑みながら言う。

二人は頷くと……。

「さっきはありがとうございました。おかげで助かりました」

二人は頭を下げる。

「別に感謝しなくても良いぜ。　俺は雪蓮がやることを代わりにやっただけだからな」

「それでもあなたは私たちの恩人です」

二人は又頭を下げた。

「分かった、もう良い。十分だ」

俺は二人に顔を上げさせた。

そして拍手喝采が起こる。
俺は別に感謝されるような立派な人間ではないんだがな……。

「見事な狙撃じゃったぞ」
祭さんが近寄って来た。
どうやら近くで様子を窺っていたらしい。
「まあ、かなり使えるようにはなったが……まだまだだ」
「良く言うわ、わしですら矢がいつ放たれたのか分からんかったぞ」
「俺はただ今自分が出来ることをやっただけだ」
「本当、強くなったもんじゃ」
祭さんは笑いながら背中を叩く。
「師として鼻が高いわい」
「それは良かった」
「それじゃあ、城に行きましょ……いろいろと話したいこともあるしね」

「そうだな……行くか」

祭さんは黄巾党の死体の処理を兵に命じて、俺と雪蓮と祭さんは城に向かって歩き出す。

「お帰り、琥音」

雪蓮が俺の顔を見ながら言う。

俺は苦笑しながらも言う。

「ただいま……」

こうして、俺は一時的ではあるが再び雪蓮たちの世話になることになった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7179u/

真・恋姫†無双～技を極める傭兵

2011年11月29日01時53分発行